



昭和18年9月、土浦駅から行進して土浦海軍航空隊に入隊する「海軍飛行予備学生」第13期生。(土浦海軍航空隊正門)

『おか目八目』HPより転載

霞ヶ浦(その13)～海軍飛行予備学生～

土浦海軍航空隊といえば「予科練」の地として有名ですが、土浦海軍航空隊には「飛行予科練習生(予科練)教育部」の他にもう一つの教育錬成組織、「飛行予備学生教育部」があり、飛行予備学生への基礎教育が約4ヶ月間行われていました。前者が下士官パイロットを養成したのに対し、後者は士官(幹部)パイロットを養成しました。土浦中学でも多くの先輩たちが予備学生や学徒出陣を経て戦場に赴きました。

海軍飛行予備学生制度

海軍の幹部(指揮官)は、海軍兵学校・海軍機関学校を卒業した「士官」と下士官から選抜された「特務士官」から構成されていますが、1932(昭和7)年、満州事変が勃発すると、航空幹部(士官)の増強が必要となりました。そのため1934(昭和9)年から、大学や旧制高等学校・専門学校出身者から募集して、年間30～40人(当初は飛行科のみ)ほどを採用し、海軍少尉に任官させる予備学生制度が設けられました。アジア太平洋戦争が勃発すると「飛行科(飛行機搭乗員たる士官を育成)」に加え、「整備科(飛行機の整備を担当する士官を育成)」「兵科(艦隊勤務の士官を育成)」にも拡大されましたが、霞ヶ浦、土浦海軍航空隊と関わりが深かったのが飛行科の海軍飛行予備学生でした。海軍飛行予備学生制度は、旧制大学卒業生で満26才未満の者、大学予科、旧制高等学校、専門学校卒業生で満24才未満の者で、志願し選抜試験に合格した者に錬成教育を施すものでした。教育期間は約1年で、まず約4ヶ月間、基礎的、座学的な科目を土浦海軍航空隊等の基礎教程で行い、基礎教程卒業後おおむね半年間、各練習航空隊で練習機による実習を行いました(「予科練」と「飛練」の関係と同じです)。入隊1年後に少尉に任官させ、その後から実用機教程に進み、機種や練度により期間の長短はありますが、実用機課程数ヶ月で一人前の航空機搭乗員(士官)に育て上げるものでした。

1934(昭和9)年11月入隊の第1期学生は僅かに6名であり、1942(昭和17)年9

月の第12期学生までは100名以下の少数採用でしたが、アジア太平洋戦争が激化、航空決戦が熾烈となった1943(昭和18)年9月には、昭和18年度の繰り上げ卒業生から5万数千名が海軍飛行予備学生を志願し、5,199名が合格、第13期学生として採用されました。この大量採用の理由は、予想以上の搭乗員の損耗と、予科練習生の採用増加で、海軍兵学校出身の搭乗員のみでは士官搭乗員が不足したためでした。彼らはおおむね半数に分かれて土浦、三重海軍航空隊に入隊、10月1日に予備学生を命じられ、基礎教育が開始されました。1944(昭和19)年1月中旬、土浦、三重海軍航空隊を卒業、1月末までに中練(93式中間練習機)教程のため、土浦海軍航空隊卒業生は谷田部、筑波、第2美保、東京、出水、高雄、北浦、上海航空隊へ転隊、速成教育を施し、一定の練度に達した者から他の航空隊に転隊し、実用機教程に入りました。1944(昭和19)年10月には海軍少尉に任官、戦場に赴き、台湾沖、比島、ウルシー、硫黄島、沖縄、本土周辺の航空戦で、13期生は先頭に立って奮闘し、1,616名が散華、その内特攻での戦没者は44名にのぼりました。

次の第14期生は従来の期と異なり、「学徒出陣」による徴兵招集により採用されました。1943(昭和18)年10月1日、勅令第75号により全国の大学、旧制高等学校・専門学校の文科系学生の徴兵猶予令が停止され、20才以上の学生が、各学校に籍を置いたまま休学とされ、臨時徴兵検査を受けることになりました。その結果、学業途上の学生たちが陸軍に約8万名、海軍に約1800名が召集を受け、

兵として入隊しました。海軍では12月1日、横須賀、呉、佐世保、舞鶴の各海兵団に二等水兵として入団させ、教育期間中に予備学生・予備生徒(大学予科・高等学校・専門学校在生から入隊した者を「予備生徒」と呼びました)採用試験が行われ、1944(昭和19)年の1月末に、2,365名が飛行予備学生操縦専修及び偵察専修として土浦海軍航空隊へ、1,260名が飛行要務専修として鹿児島海軍航空隊へ転隊しました。同じく第1期予備生徒として1,270名が入隊、各海兵団から三重航空隊へ転隊し、基礎教育を受けました。土浦海軍航空隊での基礎教育は同年5月に修了、中練教程のため操縦専修は陸上機が谷田部、出水、第2美保、博多海軍航空隊へ、水上機が鹿島、北浦、詫間海軍航空隊へ、偵察専修は大井、徳島海軍航空隊へ転隊しました。操縦専修は4ヶ月の中練教程後、9月下旬以降実用機教程に進み、偵察専修は1945(昭和20)年3月から4月に実戦部隊に配属となっています。

中学40回の吉田一也氏(元土浦市教育委員会教育次長は、1943(昭和18)年9月、早稲田大学法学部を卒業(6ヶ月短縮)し、10月末に水戸三の丸小学校で臨時徴兵検査を受けて、12月10日、横須賀第2海兵団に入団しました(入団の準備で髪の毛を切った時に、これが遺髪になるかもしれないと母親に手渡しています)。海兵団で行われた飛行予備学生になるための適性検査に合格して、1944(昭和19)年1月25日、第14期飛行予備学生として土浦海軍航空隊に入隊、第13分隊に所属しました。分隊長は同志社大学出身の第11期生で、階級は中尉、同志

うち特攻戦没者は658名にのぼりました。



特攻隊員として鹿屋海軍航空隊で終戦を迎えた渡辺賢一氏(予備学生14期、新潟県十日町市圓通寺住職)の努力で建立された慰霊の像と移設された谷田部航空隊の隊門(圓通寺境内) (『神風特別攻撃隊』HP号より転載)

社大時代はラグビーの選手でした。土浦海軍航空隊での基礎教育修了後、5月27日の海軍記念日に谷田部海軍航空隊に配属(総勢255名)され、93式中間練習機(赤トロンボ)による飛行訓練を約4ヶ月受けました。さらに実用機(戦闘機)教程に進むため、10月1日神ノ池海軍航空隊に赴任(120名)しましたが、神ノ池海軍航空隊が特攻機「桜花」の訓練基地になったため、11月4日、再び谷田部海軍航空隊に戻りました。11月25日付で少尉に任官、単座戦闘機を複座に改造した練習機で訓練を受けていましたが、1945(昭和20)年2月14日以降、空襲が激化、谷田部航空隊が迎撃の実戦態勢となり搭乗訓練ができなくなりました。2月17日の晩には、特攻隊志願者の募集が行われ、第14期生からは第1次特攻隊に28名が選抜され、零戦による特攻訓練が毎日行われました(飛行機や燃料の不足から特攻隊以外の訓練はできなくなりました)。4月2日、谷田部航空隊の特攻隊は神風特別攻撃隊昭和隊と命名され、九州の鹿屋航空隊に進出、4月14日の第1次から5月11日の第7次まで出撃、14期生は28名のうち21名が出撃戦死、7名が出撃命令を待ちつつ終戦を迎えています。第1次の選抜にもれた吉田氏は、2次・3次特攻要員として本土決戦に備えるなかで終戦を迎えました。14期生全体では、予備生徒1期生と合わせると、4895名が採用され、492名が戦没、うち特攻戦没者は200名となっています。

その後、採用は昭和20年4月入隊の第16期生まで行われ、1期生から16期生まで、約15,000名が入隊、戦没者は約2,400名、

土浦海軍航空隊での生活

土浦海軍航空隊での飛行予備学生への教育は約4ヶ月間、海軍飛行科士官としての基礎を習得させるもので、早朝5時(冬期は6時)の総員起こしから午後9時の巡検まで、予科練生と同様、分刻みの日課が課せられていました。午前は座学が中心で、航空力学、気象学、物理学、機械学、さらに砲術、水雷術、航海術、運用術等にわたって幅広く海軍士官としての基礎知識が詰め込まれました。そして毎日のように試験が行われ、成績不良者には予備学生罷免、二等水兵への降格が待っていました。しかし、数学など理科系の授業で理解できないところがあっても、同じ班の理系学部出身者に教えを請うと教官よりも分かりやすく説明してくれて、すぐ理解できました。午後は体育が中心で通信訓練や陸戦、短

艇(カッター)、体操、武術、マラソン等の訓練が続けられ、予科練生と同様に班や分隊対抗で競技が行われました。予備学生の中には、入隊前の学生時代に、柔道、剣道、相撲、空手、レスリング、ボクシング、ラグビー、陸上競技、水泳、野球、スキー、スケート、馬術、その他運動部の有名選手や有段者が多数そろっていたので、対抗試合でその実力を発揮して大活躍、分隊員の士気を鼓舞していました。

大学等の自由な雰囲気の中で学生生活を謳歌していた飛行予備学生たちにとって海兵団や土浦海軍航空隊での厳しい規律や訓練には少々こたえた面もあったようで、彼らの日記には予科練生には見られない批判や不満が率直に記されています。しかし、予備学生には入隊すると准士官(予備生徒は上等兵曹)という地位が与えられ、日中の訓練や教育、起居動作の躰は予科練生同様に厳しく行われましたが、食事は従兵(将校に専属して、身の回りの世話などをする兵卒・従卒)が長机の上にてぎわよく配膳をしてくれるし、兵舎内には予備学生だけで上官もいないので、気分的にはゆったりとしていたようです。また予備学生が受ける制裁は鉄拳か練兵場一周の駆け足などで、予科練生を泣かせたバツタ(海軍精神注入棒)による罰直はなかったようです。

1943(昭和18)～1944(昭和19)年頃の土浦海軍航空隊の人員は、「予科練生」約6,000名、「予備学生」約2,000名、職員約1,000名で、総員約9,000名にのぼっていました。予備学生の兵舎は精進川の左岸(現在の霞ヶ浦高等学校校付近)、予科練生の兵舎は右

岸、現在の武器学校区域)にあって、予科練生とは一緒に講義や訓練を受けることもないので、めったに顔を合わせることもありませんでした。中学45回の戸張礼記氏も「10才年上の兄(戸張忠勇氏)は、日本大学本科の学生でしたが第13期予備学生として採用となりました。私が昭和19年6月1日に甲種飛行予科練習生第14期として入隊して間もなく、兄は予備学生として何かの教育あるいは用件で土浦海軍航空隊に滞在していたようです。ある日、兵舎内で吊床訓練をしていると、兄がいつの間にか窓の外に立って私を見ていました。訓練中だったので、声を掛け合うことはできませんでしたが、きっと兄は私のことが心配だったのでしょう。その後、隊内で兄に会ったことは一度もありませんでしたが、同じ所に肉親がいるというだけで随分心強かった。」と述べています(『続・阿見町と予科練』)。同じ航空隊内においても、それぞれ分刻みの日課で、兄弟といえども会う暇などなかったようです。

卒業後、飛行予備学生は少尉に任官して、小隊長となって部下を率いて空の戦場に赴きます。飛行学生を指導した教官たちは「前線には予科練出身の熟練パイロットが多くいる。お前たちはパイロットとしての熟練度は幾分不十分であっても、その指揮能力で部下を引っ張っていかなければならない。」と予備学生たちを叱咤激励し、予備学生たちも操縦術のみならず、指揮官として必要な能力を身につけるべく、訓練に取り組んでいました。

参考 「海軍航空隊ものがたり」阿見町 (高21回 松井泰寿)



後輩に見送られて土浦海軍航空隊を後にし、飛行練習生として各地の練習航空隊に向かう予科練卒業生。『海軍航空隊ものがたり』より転載)

霞ヶ浦(その14)～予科練を巣立って～

厳しい教育を修了した予科練生は、卒業式で教官や後輩に祝福され、「帽ふれ」の見送りを受けて正門を後にしました。卒業生は飛行練習生(飛練)教程に進み、約9ヶ月間(後に6ヶ月)練習機での操縦訓練を受け、更に各地の練習航空隊で実用機の訓練を受けた後に、戦地に飛び立っていきました。

飛行練習生

予科練生の教育期間は、各期で変更が多く、昭和18年5月時点の法規上の期間は乙飛2年6ヶ月、甲飛1年6ヶ月でした。適性検査の結果により、操縦専修・偵察専修に分けられ、それぞれの課程を終えて予科練を卒業すると、甲・乙・丙各種が合流して本科である飛行練習生(飛練教程での訓練を受けました)。

操縦専修生は陸上機専攻・水上機専攻に分かれて横須賀、霞ヶ浦の練習航空隊(昭和14年以降は筑波海軍航空隊・谷田部海軍航空隊等の各地の練習航空隊)で訓練を受けました。練習航空隊では飛行訓練とともに、学科や整備訓練も行われました。偵察専修は横須賀海軍航空隊(昭和14年以降は鈴鹿海軍航空隊)で、学科とともに「白菊」などの練習機で航法、通信、射撃、写真撮影等の実習を受けました。

飛行練習生教程では、搭乗員として必要な知識及び技能を習得させ、単独で飛行機を操縦できるようにする教育が施されました。その日課では「飛行作業」と呼ばれる飛行訓練が主体となりましたが、約9ヶ月(後に6ヶ月)で卒業となるため、「鬼の筑波、地獄の谷田部」と言われたように、予科練よりいっそう厳しい訓練が行われていました。しかし練習生たちは「いよいよ飛行機に乗れる、大空を飛べる」との希望に胸を躍らせていました。

予科練では、1個班が25～26名で編成され、それに下士官の班長が一人配置されていますが、飛練の1個班は練習生10名で、班長と班付の教員が1名ずつ

配置されていました。教員1名が練習生5名(この飛行機単位の組み合わせをペアと呼んでいました)を受け持つ飛行訓練を実施するため、教員には実戦部隊から年の近い予科練出身者が多く配属されていました。入隊式後、貸与された飛行服・飛行帽・飛行靴それにライフジャケット一式を着込んだ練習生たちは外見だけはもう一人前のパイロット、飛練での日課が始まります。

飛行練習生は朝5時の総員起(こし)、朝礼、清掃の後、6時から朝食、朝食には鶏卵がつき、ミルクも毎日配食されました。いわゆる航空食で、予科練時代とは比較にならない待遇であり、これで搭乗員になったことを実感したといえます。朝食が終わると、食卓番(食事当番)だけが後片づけに残り、他の者は格納庫へ走り、教員の指導によって、格納庫から飛行機を出して、エプロンに並べます。「飛行始め」までに飛行準備を完了しなければなりません。7時30分から飛行始め、昼食を挟んで15時30分の飛行止めまで、各ペアごとに訓練が実施され、1回の飛行時間は1人当たり20分ほど、練習生たちは交代で大空へ飛び立っていきました。

飛行訓練は、93式中間練習機(初心者に乗っている練習機であることを周知させるために、最も目立つイエロー・オレンジ色に塗られていたので「赤トンボ」の愛称で呼ばれていました)等の教育用の練習機を使用して実施されました。最初は地上教育、機体の点検手順、エンジンの始動から試運転、更に地上滑走の要領など、実際に飛行機を使ってそれらの技能を習得します。いろいろな数

値を手帳にメモし、その日習ったことは、その日のうちに頭に入れるのが鉄則でした。



教官の前に駆け足で走り寄り、敬礼しながら、「〇〇練習生、定所着陸に出発しまーす」と大きな声で報告する飛行練習生。(「老兵の繰り言」HPより転載)

次に、飛行場を中心にして作られている「パノラマ模型」を囲んで、飛行場周辺の地形や著名な目標(霞ヶ浦・筑波・谷田部航空隊ならば筑波山・霞ヶ浦など)の方位と距離などを頭に覚え込んだ後、待望の飛行訓練が始まります。

飛行訓練は、教員が後席に同乗した「離着陸飛行」から始まります。これは飛行場の周辺上空を回りながら、離陸と着陸を繰り返して練習する、最も初歩的な飛行訓練です。しかも海軍の飛行機は航空母艦の狭い飛行甲板に着艦しなければならぬため、日ごろから飛行甲板に

着艦することを想定した着陸を行っており、最も短かい滑走距離で停止する着陸技術が求められていました。「離着陸の同乗飛行」に合格すると、「単独飛行」が許可されます。後席には重心を保つため教員の代わりに砂袋が積み込まれます。もう後ろから怒鳴られる心配はありません。練習生は「自分だけで飛行機の操縦ができるのだ。念願の天空を自分の腕一本で飛べるのだ」とワクワクしながら操縦桿を握っていました。しかし訓練は一段と厳しくなり、宙返りなどの「特殊飛行」や「編隊飛行」、「定所着陸(航空母艦の飛行甲板を想定した広さの区画に着陸させる訓練)」、「計器飛行」へと進んでいきました。

飛行訓練終了後15時45分からは別科主に運動の時間でしたが、多くはその日の飛行訓練での注意点に割られました。しかも口頭での注意だけではなく、腕立て伏せなどの罰直(それも総員罰直)が日課の一部ようになっていきました。16時45分から夕食。夕食後、酒保が開き、18時30分の温習始めまでが唯一息が抜ける時間でした。温習の後、21時に就寝。こうした日課が卒業飛行まで変わることなく続けられていきました。

実用機教程

海軍の飛行機には、その使用目的によっていろいろな種類がありました。まず陸上機と水上機に分けられ、陸上機の中で航空母艦でも使用できるものを、艦上機と呼んでいました。艦上戦闘機(艦載・艦上爆撃機(艦爆)・艦上攻撃機(艦攻))と呼ばれる機種でした。爆撃機と攻撃機の違いは、急降下爆撃ができるかど

うかで決められていました。急降下(降下角度45度以上)爆撃が可能な機種を爆撃機と呼び、それ以外は攻撃機と呼ばれました。攻撃機は水平爆撃と魚雷攻撃(雷撃)を展開しました。また双発の飛行機を中型、四発を大型と呼んで区分しており、中型攻撃機(中攻)と大型飛行艇(大艇)がありました。

飛行練習生教程が修了すると、操縦専修生は、適性に応じて戦闘機、艦上爆撃機、艦上攻撃機、陸上攻撃機、偵察機、水上機など機種別に、6ヶ月間の延長教程(実用機教程)の教育を受けました。操縦専修生たちは、筑波航空隊(戦闘機)、宇佐航空隊(艦爆)、百里原航空隊(艦攻)、豊橋航空隊(陸攻)、鹿島航空隊(水上機)など、全国各地に点在する練習航空隊で実用機を使用した訓練を受けた後、各部隊に配属され、一人前の搭乗員となって第一線へ飛び立っていきました。



谷田部海軍航空隊で、訓練開始前にエプロンに勢揃いしたゼロ戦。飛行機の垂直後尾「ヤ-170」の「ヤ」は「谷田部海軍航空隊」の識別記号。
(「特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ」HPより転載)

戦いの空へ

予科練出身者が初めて実戦に参加したのは、1937(昭和12)年7月7日に勃発した日中戦争でした。同年8月15日、海軍航空隊が長崎県の大村基地および台湾の台北基地から、38機の96式陸上攻撃機を発進させ、中国の南京、上海を爆撃したもので、これが予科練出身者(乙飛第1期〜第3期生)の初陣となりました。

昭和18年夏以降、終戦までに約22万余の予科練生が大量採用されましたが、戦況の悪化、航空機および燃料の不足等により、飛練教育が不可能になり「翼なき予科練」の時代になっていきました。この時期以降の予科練生は、航空機搭乗員を夢見ていたものの、主として人間魚雷「回天」・水上特攻艇「震洋」・人間機雷「伏竜」等の、航空機以外の特攻兵器の要員としての教育を受けることになりました。さらに1945(昭和20)年3月、一部の部隊を除いて予科練教育は凍結され、6月には各予科練航空隊は解散されました。一部の特攻要員(13期後期生は「回天」、14期一次生は「震洋」で出撃、もしくは待機中でした)を除く多くの予科練生は、本土決戦要員(兵器はなく、有るのは爆薬を抱えての体当たり、肉弾だけでした)として各部隊に転属となり、終戦を迎えました。(高21回 松井泰寿)

1941(昭和16)年12月8日、アジア太平洋戦争が勃発、真珠湾攻撃に参加した予科練出身搭乗員(乙飛第1期〜第9期と甲飛第1期〜第4期)は、全出撃搭乗員の約4割を占めていたように、戦前に予科練を卒業した練習生は、下士官として航空機搭乗員の中核となっていました。そのため戦死率も非常に高く、約8割が戦死しています。

1942(昭和17)年6月のミッドウェー海戦の敗北以後、戦局は一変、予科練出身者を含む熟練搭乗員の損失が増加し、次第に育成したばかりの若い予科練出身搭乗員等を第一線に送らざるを得なくなりました。1944(昭和19)年10月の比島沖海戦において、初めて特別攻撃隊が編成された時、その24名の特攻隊員全員が甲飛第10期生でした。その後、沖縄における菊水作戦、および本土防衛作戦でも、予科練出身者主に10期〜13期

飛行予科練習生の年度別入隊、戦死者数(海軍会資料)

昭和年	入隊者数	戦死者数	戦死者率(%)
5	79	49	62.0
6	128	65	50.8
7	157	105	66.9
8	150	96	64.0
9	200	109	54.5
10	187	125	66.8
11	204	168	82.4
12	469	348	74.2
13	954	760	80.0
14	1,297	1,005	77.5
15	2,073	1,601	77.2
16	6,456	4,648	72.0
17	8,872	4,662	52.5
18	44,138	4,157	9.4
19	151,471	1,070	0.7
20	25,034	130	0.5
合計	241,869	19,098	7.9

(注) この資料は、甲種、乙種、丙種、特(乙)種の全入隊者数である。教育場所は、特に昭和17年以降、従来の横濱習生または土浦航空隊の一方から、次第に三浦、鹿島、比島、鹿島、奈良、西宮、岡崎、豊後、熊本、鹿児島、小高士等に拡大しており、すべてを含む。

【参考資料】

『海軍航空隊ものがたり』阿見町
『蒼空の果てに』特攻隊員の記録

永末千里著



「進修1号」「進修2号」(文部省式1型機)を使用したの滑空班の練習風景(昭和17年)(中42回『卒業アルバム』より転載)

霞ヶ浦(その15) ~空への憧れ、滑空班~

1937(昭和12)年の日中戦争以降、航空兵力の重要性が認識されると、文部省は旧制中学校での滑空部の設立と滑空訓練を推奨し、1940(昭和15)年4月に学校滑空訓練用となる文部省標準型の初級滑空機の形式を発表。1941(昭和16)年9月初頭には、将来の軍用機パイロット育成を目的として、文部省と陸軍省とによって旧制中学校の第3学年から滑空訓練を正課とすることが決定され、土浦中学校にも滑空班が誕生、初級滑空機(プライマリー)である文部省式1型機での訓練が始まった。

滑空班誕生

1941(昭和16)年5月22日、土浦中学校生徒会(進修会)は戦時体制に即応するために、土浦中学校進修報国団と改組され、総務部・鍛錬部・国防部・学芸部・生活部の下に26の班が設けられました。この時、新たに誕生したのが国防部の滑空(グライダー)班です。「プライマリー」(初級機)を購入して思い切り練習したい」という希望の下に集まった班員は実に120余名、校内一の班員数となりましたが、初級機の購入もままならず、班員たちは模型飛行機の製作に没頭していました。こうした班員たちの熱意が通じたのか、翌1942(昭和17)年、土浦中学校でも文部省式1型機2機を購入、早速班長の入江信太郎先生(体育科)を教官として訓練が開始されました。同年6月20日には大日本飛行協会中央滑空訓練所長沼澤大佐をはじめ各方面からの来賓を迎え2機の命名式が挙行され、「進修1号」「進修2号」と名づけられました。

文部省型は教官の乗らない単座機でした。公定価格は当初は1機580円でしたが、1941(昭和16)年12月に550円に変更されています。学校が購入する際には、大日本飛行協会から200〜300円の補助金が交付され、ゴム索の公定価格は1本139円でした。

滑空班の活動

中学44回の酒井実氏は滑空班の活動を『進修百年・滑空班の思い出』の中で次のように述べています。

「こうして時が経て、宗光校長からの達し『君達滑空班の為にグライダーを購入して組立られるぞ』とのこと、教官は入江信太郎先生であった。裏門(現在の正門)の北側の作業棟を改造した格納庫に、その2機の初級機グライダーは「進修1号・2号」と命名されて、ターンバックルを締めつけバランスを取ったりして組立てられた。みんなして触ってみたり、前から眺めたり、喜びいっぱい『万岁』を三唱した。

さていよいよ飛行場(校庭)へ。芝生とクローバーの葉が外周に広がる美しい校庭である。周囲に樺があり、北側に拡張された校庭の向こうには桑畑が広がっていた。入江教官の気合いが入った。『お前らが空を飛ぶことになった。何んとしても団結・緻密な技能・勇気こそが最も大切なことである。いいな。』

『ハイ。』
と答えたものの緊張した。先づ(入江先生による)模範飛行である。尾翼の後に杭を打つ。尻尾のような機体の後についた綱を杭にからませる。左翼の端を持って機体を水平に支える者。三角の柱の



「空を征する者は世界を征する」と、猛訓練を重ねる第3学年(中46回)滑空班員の面々(昭和19年9月撮影)(中46回卒業アルバムより転載)

ある搭乗席に乗ってバンドを締める者。その先端のフックからV字型にゴム綱を開き、左右7人づつに開いて引っ張る者。

『目標、右前方、鹿島神社の社殿屋根端』
『ヨーシ』

『左前方 射撃場の左端』
『ヨーシ』

『引け』 イッチニイ イッチニイ
ゴム綱が次第に張られる。

『離せ』
後の綱を離せば機体はスーッと空に揚がる。(数秒間の飛行の後)滑らかに着陸。操縦桿1本の操作である。遠くの機体まで駆け寄ると先生のオツカナイ顔は笑顔となっていた。バンドをはづして地上に：いわゆるゴム引きパチンコ式のグライダーである。17人編成で17回に1

回の順番で乗れるのである。14回綱引きで、しかも途中で訓練中止となれば翌日次回ということになる。

田村・井坂・山口さん等々体重の軽い者は、砂袋の上に座って重さを加えての搭乗になる。ホンの一瞬の滞空時間ではあるが、緊張の一瞬である。風向を計算し風に向かって飛ぶ。操縦桿の操作で、あまり引き過ぎると上を向いて失速して地上にドスン、前に押し過ぎると地上を滑るだけで揚がらない。やっと順番が廻ってきたのに『成功』『失敗』運命が決まる。天候次第の訓練でその天候が心配だった。

しかし意気軒昂、昨日の順番を待って搭乗するのが楽しみで、皆授業が終わると格納庫へ集まってくる。薄暮に至るまで訓練に励んだものだった。技術も次第に上達し、着地時に凸面があればそれを避けて滑らかに着陸し、風を利用して水平のままに静止し皆の来るのを待つようにもなった。かくして頭の中には当然アクロバット滑空がチラつくこともある。入江教官もその技量に安心したのか、自主的に訓練することも度々あった。或日そんな時、飛び揚がった瞬間両手をひるげ操縦桿を放して飛行した。トタンに校庭の隅にある鉄棒に激突し、機体は中破した。長南さんであった。『シュン』となつて全員して格納庫に納め帰校した。翌日どんなことになるかと不安一杯で教官先生の前に行った。雷は落ちたが、搭乗員の怪我は無く、修理すること一件落着した。

このように班員たちは、真夏の灼熱や筑波風の寒風も物ともせず、「空を征する者は世界を征する」と、意気天を突く

勢いで訓練に訓練を重ねていきました。その結果、その技量は目覚ましい進歩を遂げ、水戸の陸軍飛行学校で行われた旧制中学校訓練講習会(県主催、昭和17年8月17日〜25日)には、5年生の大浦、色川、萩島、4年生の大島、大熊の5名が参加、県下旧制中学校より選抜された滑空班員とともに9日間の講習訓練を受け、技量の向上と貴重な体験を得て帰校しています。

合宿訓練

1940(昭和15)年、石岡市半ノ木に「大日本飛行協会中央滑空訓練所」が設立されました(現在、同地は法政大学の所有する石岡総合体育施設となっており、学生たちの合宿などに利用されています)。

格納庫、宿舍、講堂、事務所などの施設とともに初級から高級までの訓練機を備え、教授陣には航空界の第一人者が就いていました。グライダー製作所もあり、主に文部省型を、部品から完成機までの一貫生産で行い、月産10機程度製作していました。当時の石岡市は滑空機の製造、訓練、教育と、滑空界の一大拠点となっていたのです。土浦中学校の滑空班員もこの半ノ木訓練所で訓練を受けています。学校から砂利道の水戸街道を「銀色の翼」のバッジを着けて自転車です。石岡に向かい、「はし本旅館」に宿泊して、入江先生の指揮で滑空班(グライダー部)の査閲を受けた時もありました。ゴム索を引いて飛び上がったのは一人一人が成績講習を受けました。半ノ木には自動車でロープを牽引して高く飛ぶ中級機、練習機やセスナ機に引かれて舞い上がり、上昇気流に乗って大空に浮遊する

高級機もあつて、それらの飛行を眺めて、班員たちは賛嘆の声をあげていました。また、大日本飛行協会は鹿島郡軽野村(現神栖市東和田砂山都市緑地)にも滑空場を建設しており、ここでも合宿訓練が行われていました。中学45回卒の田村光氏は、1944(昭和19)年3月に実施された合宿訓練の様子を次のように記しています。

「鹿島滑空場は、約30メートルの砂山にあり、合宿も終了に近づいた頃は、その最高峰からの滑空になった。ここからの滑空は、約30数秒の滞空時間がとれ、本当に空を飛んでいるんだな、という感を持てた。しかし、着陸地点から最高峰までの機体運搬が一苦労であった。台車は砂地のため使用できず、皆でかつぎ上げて次の滑空に移るのである。一人の搭乗のため、皆で協力し、10数回の後に搭乗である。ここでも友情のありがたさを痛感したものである。」(「進修百年・友情に支えられた滑空人生」より)

この訓練には土浦中学生(主将は中学44回の酒井実氏)のほか、水戸中学校、北海道中学校、日立中学校、竜ヶ崎中学校、下妻中学校等々の生徒も参加しており、電気もない小屋に寝起きしての一週間の合宿でした。合宿中には、「さつまいも」を食べ、枕を並べて寝ていると、やはり訓練に参加していた旧制水戸高校生のストーム(学生寮などで、寮生が集団で、夜分、騒々しく氣勢をあげて楽しむこと。多く旧制高校の生徒が行ったものを指して言う)に見舞われ、気合いを入れられて最後には大きい声で軍歌や寮歌などを合唱し、大笑いした夜もありました。

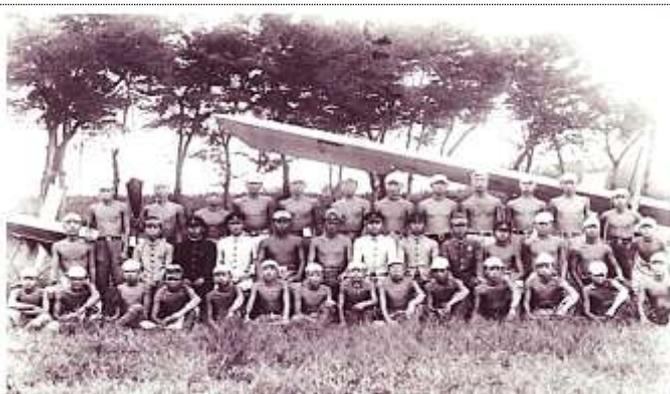
合宿も無事終了、砂山の頂上から太平洋に向かって飛んでいく心地よさを味わい、ますます空への憧れが強くなりましたが、戦況は一層厳しくなってきました。そのため1944(昭和19)年6月からは3年生以上が通年動員され、阿見の第一海軍航空廠などで働くことになり、グライダー訓練どころか、勉強も許されない状況になってしまいました。



鹿島滑空場での「合宿訓練」参加者(昭和19年3月)(中45回卒 田村光氏寄贈)。「大日本飛行協会中央滑空訓練所」跡地に建つ「徳学の碑」(石岡市半ノ木)(上右)、同地の滑走路跡。現在は龍神山を背景にラグビー練習場になっています(上左)

文部省式1型機の諸元

全長：5.54m
全幅：10.3m
操縦席高：2.35m
翼面積：15.4㎡
自重：90kg
全備重量：150kg
滑空速度：46.5km/h.
乗員：1名



「滑空班予科練入隊者壮行記念」(昭和 18 年夏)。滑空班より甲種 13 期生として入隊する大塚嘉孝氏(中 43 回・2 列目左より 5 人目)、鶴田重郎氏(中 44 回・2 列目右より 6 人目)、萩原藤之助(中 45 回・2 列目左より 3 番目)と滑空班達。2 列目左より 6 人目は入江信太郎先生、最前列左より 6 番目は戸張礼記氏(中 45 回)。(戸張礼記氏より提供)

霞ヶ浦(その 16) ~滑空班から戦いの空へ~

1941(昭和 16)年 5 月 22 日に誕生した土浦中学滑空班。大空を鳥のように飛ぶ夢を抱いた班員たちのなかには、その夢の実現と救国の思いで予科練を志願し、入隊する者もありました。今回は滑空班から予科練を経て、戦場に赴いた 3 名の先輩たち(中 43 回大塚嘉孝氏、中 45 回飯島福男氏・戸張礼記氏)の戦いの軌跡をたどってみます。

第 2 郡山航空隊第 1 次特攻隊

大塚(旧姓大熊)嘉孝氏は中学校 43 回卒。1943(昭和 18)年春、5 年生になると滑空部主将を務め、毎日校庭を占領して滑空訓練に明け暮れていました。卒業半年前の同年 10 月 1 日、土浦海軍航空隊に入隊、「第 13 期甲種飛行予科練習生」を命じられました。10 ヶ月の教育期間中の 1944(昭和 19)年 6 月には、写真家土門拳が土浦海軍航空隊の予科練生と起居を共にしながら、予科練生の生活や訓練生活について写真撮影を行っていました。同年 7 月 25 日に卒業した甲種 13 期生は全国の練習航空隊に散って行きました。13 期生 1928 名中首席で卒業した大塚氏は「第 39 期飛行術練習生」として陸上機専修となりました。8 月 1 日からは谷田部海軍航空隊で飛行作業、訓練が開始され、12 月に飛行練習生教程を終了、実用機教程へ進むはずでしたが、航空隊ごと山形県の神町航空隊(跡地は現在山形空港となっています)へ移動し基礎訓練が続けられました。1945(昭和 20)年 4 月 9 日に第 1 次特攻隊要員 13 名に選抜され、同年 5 月、第 2 郡山海軍航空隊に移動、全国の各航空隊から集結した同期生と特攻訓練を開始しました。当時、前線では熟練搭乗員が次から次へと消耗していった。極端に戦力は低下していました。従って後続兵員の補充は喫緊の要務でした。一日でも早く一人前の搭乗員に仕立て上げて、特攻隊員として前線に送り出さねばなりません。そのために全国各地に配属された 13 期生から最も優秀と見られた 72 名で、第 1 次特攻隊が編成されたのです。この特攻隊は本土最

後の航空特攻隊として(決号作戦)、米軍が本土進攻のときに攻撃するということで、93 式中間練習機(赤トンボ)による夜間特攻訓練を主にやっていました。たった一度の出撃で立派に死ぬための訓練の日々を大塚氏は『進修百年』の中で『戦争末期』との題で次のように記しています。

「：：日夜文字通り昼も夜もない訓練に次ぐ訓練。然も死ぬための。不思議に『死』に対する恐怖は感じなかった。いや『死』と言う事実が、自分自身、現実のものとはなっていないかったのかも知れない。軍国主義の教育はマインドコントロールだ。

只、真夜中にふと眼が覚める。『ハテナ？俺はほんとうに死ぬのか？敵の軍艦に自らぶつかって行って、爆弾諸共、木っ端微塵となって死ぬ時、最後の瞬間まで両眼を開けたまままでいられるだろうか？』

満 18 才『死の哲学』なんてある筈もない。『死の悟り』なんてあるわけないじゃないか！何らの解決策も見出せないまま、又深い眠りに還ると明朝も厳しい訓練が待っている。：：」

出撃のための前進基地も決まり、1945(昭和 20)年 8 月 9 日、郡山基地で出撃命令を待っていた大塚氏が、訓練を終えた特攻機を掩体壕に運んだ直後、急襲してきた米空母艦載機 F4U コルセア機のロケット弾の破片が飛行靴の上から左足首を貫通しました。その時の状況を

「：：黒い煙を吐いたロケット弾が地上近くで爆発。一瞬左足にすごい衝撃が走った。ウワッ！飛行靴を脱ぐと、左足小指のつけ根から土踏まずに、破片が貫

通していた。前もって教えられた通りに、大腿部を止血した。痛みは感じない。足全体がしびれている。出血もあまりない。意外と冷静だった。

常識的に『これで俺は特攻には行けない死ななくてすむ。助かった。』とは思わなかった。『特攻隊として出撃できない！先輩のあとを追って死ねなくなってしまう。』と涙が頬を伝った。」と述べています。

左足首の骨を砕く重傷を負った大塚氏は入院、粗末なトンネル病室のベットに無念の思いで横たわっている間に終戦を迎えました。

土浦、松山、鹿児島に同日入隊した 13 期生と 2 ヶ月遅れで土浦に入隊した 13 期 2 次の生徒(彼らは乗る飛行機がなく回天特攻隊と震洋特攻隊に選抜されました)を合わせた甲種 13 期同期生の戦死戦没者は 107 名。現在奈良の檀原神宮若桜苑に全員の氏名を刻んだ「甲種 13 期の碑」が建てられています。

なお、大塚氏が所持していた、土門拳撮影の写真は阿見町予科練記念館に寄贈されています。

震洋特別攻撃隊

飯島(若泉)福男氏は中学校 45 回卒。1944(昭和 19)年 4 月、中学 3 年修了で土浦海軍航空隊に入隊、甲種 14 期生となりました。1945(昭和 20)年 3 月、予科練卒業を間近にした 15 日頃、総員集合がかかり「特攻要員募集」の話がありました。1000 人位の予科練生が集まりましたが、否も応も無く志願、特攻要員の指定を受け、特攻分隊として別の宿舎に起居し、3 月 22 日、600 人の仲間と一足先に

卒業、「全員帽振れ」の歓呼の中を土浦駅に向かいました(土浦中学の同級生たちも同年3月に4年修了にて繰り上げ卒業となりました)。同月24日、長崎県川棚の訓練基地に着任、5月22日まで震洋艇の教育訓練を受けました。震洋艇は小型のベニヤ板製モーターボートで、船内艇首部に250kg爆薬を搭載し、搭乗員が乗り込んで操縦して目標艦艇に体当たり攻撃を敢行する特攻兵器でした。吃水は30cm程度、トヨタ製のエンジン、バック無し、ギヤ無し、レバーで速度を調整、ハンドルは丸ハンドルで、波浪のある海上では思うように操縦ができませんでした。

飯島氏は同年6月初め、第8特攻戦隊(宿毛に本部)第21突撃隊第132部隊に着任。部隊は士官7名、搭乗員45名(全員土浦からの14期生)、本部付き14名、整備兵31名、基地隊71名(主として応召兵)でした。132部隊は土佐清水市東側の越港(こしみなど)の山腹にある横穴に艇を格納、山腹には15個の横穴が掘ってありました。隊員は数名ずつ民家に分宿し、訓練は空襲を避けて、主に夜間に行われました。隊員は越(こ)しにきて上官から特攻の覚悟を言い渡され、遺書、毛髪、爪などを故郷に送っています。特攻の目標は戦艦ではなく、上陸用舟艇や揚陸艦艇など艦の装甲板の薄いものでした。敵が上陸して来る直前を狙うように教育されましたが、250kg爆薬に敵弾が一発でも当たれば、艇もろとも吹き飛んでしまい、果たしてどれほどの効果があったのか、疑問をはさむ余裕すらありませんでした。

「突撃待機命令」や「突撃準備命令」の

発令が終戦までの間に数回ありました。普段の訓練中は、故郷の風景や学校の事友だちの事などを思い浮かべていましたが、突撃準備の待機中は穴の中で艇に乗り、このまま出撃することになるかと思いと親兄弟の顔が自然に浮かんできて、他の事などは一切頭には浮かびませんでした。幸いに舟艇を曳き出して、出撃する事はなく、終戦を迎えました。(阿見町「海軍航空隊ものがたり」より)



132部隊で航行訓練中の二人乗り「震洋」(『独破戦線』ブログより転載)。土佐清水市に残る震洋格納庫跡の前に建つ「震洋特別攻撃隊基地跡之碑」(竹田昭彦日誌HPより転載)

肉弾

戸張礼記氏は中学校45回卒。中学4年1学期半ばの1944(昭和19)年6月1日、16歳で土浦海軍航空隊に入隊、甲種14期(2次)生となりました。

戦局が悪化したため、1945(昭和20)年3月、予科練生教育は中止となり、3月15日、三沢航空隊に転隊となりました。戸張氏は三沢航空隊への転隊から終戦までの戦いの日々を次のように語って

くれました。

「午前3時、1000余の予科練生が土浦航空隊を出発、5時10分常磐線土浦駅発の臨時列車に乘車、通い慣れた土浦中学校のあたりに目をやりながら、もう帰れないかも知れないとの思いが浮かびました。

3月とはいえ、三沢は雪に埋もれていました。兵舎は木つ端葺きの平屋で、寝床は木製のベッド、風呂場は木の風呂で、湯はドラム缶で沸かしていました。風が強く、風呂帰りの手拭いがすぐに凍って棒のようになっていました。当時三沢基地には、土浦の同期生約1000人がいましたが、飛行場の整地や飛行機を爆撃から守る掩体壕の造成などの作業に明け暮れていました。トラック用のガソリンも不足していたため、トラックに綱をつけて何人もで引っ張って動かしていました。体力的にもきつい作業でしたが、飛行機に乗れないことに何より失望しました。6月8日、先に土浦から三沢に転隊していた14期前期生を特攻隊員として見送った後も、毎日掩体壕への誘導路整備作業が続いていました。7月14日早朝、米軍の艦載機グラマン数10機の空襲を受けました。群れをなして襲いかかるクマンバチのようで、バリバリという銃撃音の中、夢中で逃げ、基地の方角をふり返ると、10数条の黒煙がもくもくと噴き上がっていました。ドーンと爆発して燃え上がる火柱の中に、エンジンや翼ががっくりと落ちた飛行機(一式陸攻)が見え、その無残な最期が痛々しく、目に焼き付いて離れませんでした。

7月25日、三沢航空隊より大湊海兵団に転隊となり、14期生は特別陸戦隊

に編成替えとなりました。津軽海峡に近い、下北半島の石持納屋という部落の山林に幕舎(テント)を設営して駐屯しました。何もない駐屯地で、まず寝起きする場所から造らねばなりません。トイレは林の奥の方に穴を掘っただけ、洗面・入浴・洗濯すべて小川のほとり、急折れの流し台がいくつか並んであつただけで飯盒炊飯も儘になりました。8月に入ると陸戦訓練が始まりました。陸戦隊の目的は、石持納屋のある海岸一帯に、上陸進撃してくる敵戦車群を迎撃撃破するという、対戦車攻撃訓練でした。迎撃といっても重火器はもろろん小銃もなく、頼りは手榴弾、爆雷などの肉弾攻撃用のものばかりです。海岸線までほふく前進していき、シヤベルで身を隠す蝸壺を掘り、その中に潜んでいて、上陸する敵戦車の下に爆雷(訓練では模擬爆雷)を抱えて体ごと飛び込む対戦車攻撃訓練をやっていました。まさに肉弾攻撃で、憧れのパイロットが遂に土竜(もぐら)になったかと、がっかりしました。戦闘訓練は空襲を避けて夜間に行われました。夏とは言え下北の海岸は寒く、蝸壺掘りは自分の墓穴を掘る思いでした。

8月15日、終戦を迎え、喪失感、脱力感とともに、自分でも気付かぬまま、安堵感と、解放感がじわじわと湧いてくるのを感じていました。しかし、特攻出撃の時、先輩たちは『先に行くぞ、後を頼むぞ』と言ひ遣しました。生き残ってしまった私たちは、帽振れで見送った先輩たちへの申し訳なきで一杯でした。そしてその気持ちは86才の今も消えることはありません。」

(高21回 松井泰寿)

A c a n t h u s

第 8 2 号

平成 2 7 年 9 月 8 日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

HP <http://www.sin-syu.jp/>



予科練時代を語る小椋秀雄氏↓
小椋氏所属班の集合写真一
(小椋氏所蔵)



三重海軍航空隊奈良分遣隊甲飛 15 期の同じ班のメンバーと

①分隊長高橋大尉 ②班長さん ③小椋さん

霞ヶ浦 (その 17) ~ 民宿「秀峰」の親父さん ~

1983(昭和 58)年から始まった裏磐梯曾原湖畔での共同宿泊学習。錨のマークのついた予科練の略帽(実はボート組合で作ったもの(さうです)をかぶり、ベンツ製のエンジンを搭載した大型モーターボートで松原湖上を疾走していた秀峰の親父さん。多くの一高生たちがそのスピードに快感と恐怖を味わせてもらいました。その秀峰の親父さんも予科練の出身者。2014(平成 26)年 11 月 2 日、高 5 回飯村弘、高 21 回松井泰寿がお話をうかがってきました。

予科練に志願

民宿「秀峰」の親父さん、本名は小椋秀雄さん。1927(昭和 2)年 11 月 1 日生まれ。松原村立松原尋常小学校高等科卒業後、上京、パイロット用ゴーグル製造会社で働いていましたが、1944(昭和 19)年、あこがれていた予科練に志願しました(どうせ徴兵になるなら、早く軍人になつていたほうがよいとの思いもありました)。兄は徴兵で陸軍に入り、北支戦線で従軍中でしたが、両親は何も言いませんでした。会社の同僚 2 名も一緒に受験しましたが、小椋さんのみ合格。三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊する際には、会社の方々が壮行会を開いて送り出してくれました。

三重海軍航空隊奈良分遣隊

三重海軍航空隊奈良分遣隊は、一挙に増加した予科練甲飛第 13・14 期の生徒を教育するために新設された予科練教育航空隊で、奈良県山辺郡丹波市町(現天理市)の天理教宿舍を接收し、1943(昭和 18)年 12 月 1 日に発足しました。街中に建ち並ぶ信者詰所 20 数箇所に分散して宿舍・練兵場が設けられ、教育・訓練が行われていました(昭和 20 年 3 月 1 日には「奈良海軍航空隊」として独立しました)。

小椋さんは、1944(昭和 19)年 10 月に三重海軍航空隊奈良分遣隊に入隊(甲飛 15 期)、七つボタンの制服に袖を通しました。小椋さんの所属した班の人数は 40 名くらいで、班長さんは九州出身の下士官でした。分隊長は高橋大尉で、小椋さんは分隊長さんの従卒(将校に専属して、身の回りの世話などをする兵卒。将校当番兵)を命じられていました。早朝 5 時(冬季は 6 時)の総員起こし

から 21 時の巡検(就寝状況の確認まで、すべて 5 分前行動、移動は駆け足、何でも自分一人で素早く、スマートにできなくてはいけません。5 分前行動とは、5 分前には次の行動の心得ができていようということ。何でも 5 分前、その規律が守れないと、罰直(ばちやく)ルール違反をした者へのペナルティ、集団規律を高めるための体罰)が待っていました。息抜きができるのは、「巡検終わり」という放送が流れた後のほんのひとときでした。

午前中は座学が中心で、物理、化学、国語、漢文、地理、歴史、それに気象天測や通信(モース電音など、午後は体操や駆け足ばかりで、奈良市の若草山まで駆け足で往復させられたこともあり、班長さんが負けず嫌いで、負けると罰直が大変でした(食卓をひっくり返され、食事なしになったときもあります)。この班長さんは食事にうるさい人で、よく炊所に文句を言っていました。そのたびに炊所の態度がよけい厳しくなり、配給の時間を遅らされたり、御飯の盛りが少なくなりました。

土浦中学から同じく甲飛 15 期生として奈良分遣隊に入隊した糸賀一郎氏(中学 46 回)も「午前・午後、休む間もない厳しい教育に、しゃがむと足の筋肉が痛む毎日が続いた。(中略)3ヶ月間、休日に外出した記憶は無い。営内を散策し、法隆寺・明日香・橿原神宮などの古都の山なみや樹叢を眺め、心を慰めていた。」と記しています(『阿見と予科練』そして人々のものがたり)その後、糸賀氏は飛行練習生として昭和 19 年 11 月末に清水海軍航空隊へ移動、昭和 20 年 3 月

には土肥派遣隊となり、特殊潜航艇や桜花基地の建設に従事、同年 6 月には、海軍第 16 特別陸戦隊に所属、横須賀鎮守府での実戦訓練中に終戦を迎えました。

岡崎海軍航空隊へ

1945(昭和 20)年 3 月、愛知県碧海郡矢作町にあった岡崎海軍航空隊(現岡崎市・豊田市・安城市)に移動しましたが、飛行・整備訓練は行われず、練習生は本土決戦要員として陸戦訓練に従事する一方、伊勢湾・三河湾の防衛陣地構築に駆り出され、土方仕事ばかりしていました。奈良分遣隊では天理教の詰所の畳の上で寝ていましたが、岡崎は正規の海軍航空隊なので吊り床(ハンモック)です。1分程度でセツトや収納をしなければいけないのですが、初めのうちは慣れずに 5 分位かかってしまい、そのたびに罰直を受けていました。

岡崎でもとにかく忙しい生活でしたが、唯一の楽しみは外出でした。外出は 12 班に分けて交代で許可され、一般の民家が予科練生を受け入れて、もてなしてくれました。小椋さんは小呂町にあった黒田家(現岡崎 IC 近く)でお世話になりました。矢作町の岡崎航空隊から歩いて黒田家を訪れていましたが、黒田家では親身になって面倒をみてくれました(特におばあちゃん)。田植えの時期で忙しいときには、代わりに近所の家に接待を頼んでくれて、その家でも歓待してもらいました。

特攻隊に選抜されて横須賀に転出が決まり、特別外出が許可になりました。そこで黒田家に最後のお別れに行きました。黒田家から帰るときに、これまでお世話になったお札にと、団扇の下にそつと 10 円札をおいてきました。しかし、

横須賀への転出が遅れ、もう一度特別外出が許されて黒田を訪れると、おばあちゃんに叱られ、逆に餞別までいただいたしまいました。

横須賀久里浜、伏龍・嵐部隊へ

1945(昭和20)年7月、上等兵から兵長に昇進し、伏龍・ウ772嵐部隊に所属しました。伏龍とはアジア太平洋戦争末期に考案された特攻兵器の一つで、簡易潜水服で海底に潜み、敵上陸用舟艇に「棒機雷」を突きあげて爆破させようとするものです。本土決戦では、まず特攻機などが接近すれば人間魚雷回天や特攻艇震洋などの水上特攻部隊が迎撃、そして上陸用舟艇を水際で迎撃するのが伏龍という構想でした。

伏龍隊員は粗末なゴム服に潜水兜を被り、背中に8リットルの酸素ボンベを背負い、胸には呼吸の二酸化炭素を吸収する吸収缶を提げ、腹に鉛のバンド、足には鉛をしこんだワラジをはいて潜水しました。潜水兜にはガラス窓が付いていますが、足下しか見えず視界は悪く、総重量は68kgにも及びました。伏龍の作戦では遊泳は考えられておらず、隊員は海底を歩いて移動することになっていました。仰向けにひっくり返ると一人では起き上がれないので、常に前かがみで恐る恐る歩いていました。また船上から金属を叩いてモールス信号で辛うじて伝達するぐらいで、陸上や隣の隊員との連絡手段はありませんでした。

吸収缶は伏龍の最大の欠陥部分でした。これは長時間の潜水を可能にするために考案された半循環式の酸素供給機です。呼吸に含まれる二酸化炭素を、苛性ソーダを利用した吸収缶で除去、再び

吸入し、20分に1回くらい酸素ボンベのバルブを開けて酸素不足を補うという仕組みになっていました。訓練では鼻で吸気して口から排気するよう教育されましたが、実際には3、4回呼吸すると炭酸ガス中毒で失神しやすく、10〜15分位の潜水でも半日から1日潜水しているような気分になり、夢を見ているようでした。上官の少尉さんが見本を示すと、潜って潜水しましたが、ガス中毒になり、失神してしまいました。顔を叩けばよいのですが、上官ですのでそうもいかず困ったこともありました。

吸収缶が破れたり蛇管が外れたりして呼吸回路に海水が入ると、吸収缶の水酸化ナトリウムが海水に溶解し、大きな溶解熱のために高温となった強アルカリ性の海水が潜水兜内に噴出し肺を焼くという、きわめて重大な欠陥があり、訓練中に横須賀だけで10名の殉職者を出しています。海中では視界も悪く、動きもさらに鈍くなるため、上陸用舟艇に向かって移動するのは事実上不可能でした。「棒機雷」は長い柄を持っていましたが、水の抵抗で自由に振り回すことができず、当初5mも長さがあったものが2mに切り詰められました。隊員の直上を上陸用舟艇が通りかからない限り攻撃のチャンスはありませんでした。しかも、部隊の展開密度を上げると棒機雷が炸裂した時の爆圧で、近くの隊員まで巻き添えになるどころか次々と誘爆してしまう問題点がありました。そもそも、海中での爆発による強烈な水圧は隊員に致命的なダメージをもたらすため、上陸に先立つ砲撃が付近の海中に落ちただけで、伏龍部隊は全滅状態になっていたと思われれます。

横須賀に移ってから、小椋さんたちは毎日潜水訓練に明け暮れました。岡崎での土方作業より楽でしたし、何より毎日銀シャリや豪華な料理を食べられたのでうれしい思いをしていました。しかし、横須賀が空襲を受けた時には海軍橋のたもとに繋留してあった特攻用舟艇で一晩待機させられ、不安でまんじりとも出来ませんでした。東の空から朝日が昇ってきた時には、自然と手を合わせていました。



作ケ模 スケ模
がス模 スケ模
海軍の模 スケ模
伏龍(右)と「Wikipedia」
アメリカ人(下)アメリ
ア成ツチ(下)アメリ



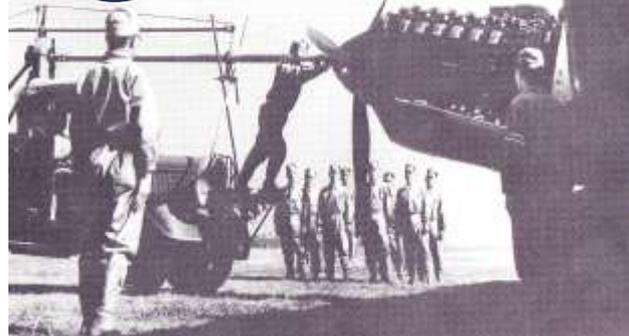
ほどの雪です。伊豆半島へ山仕事の出稼ぎに行きました。冬の出稼ぎは、夏の炭焼きとともに貴重な現金収入となり、これで子どもたちを学校に行かすことができました。昭和40年代に入り、ようやく余裕もできたので、岡崎でお世話になった黒田さんを磐梯に招待すると、おばあちゃんと娘さんが来てくれました。会津若松や西吾妻スカイラインなどを案内し、曾原湖畔の宿「ゆたか荘」に泊まってもらい、喜んでいただきましたので、多少のお礼はできたのではと思っています。

しかし1973(昭和48)年、自宅が火事で全焼し、途方に暮れていましたが、黒田さんからチツキ(かつて国鉄が行っていた小口の荷物輸送業務)で火事見舞いの品(米・味噌・醤油、その他生活必需品)が届き、有り難さに涙ができました。こうした人たちの励ましで何とか頑張ることができ、1975(昭和50)年には民宿「秀峰」を開業しました。その後、仲間たちと曾原民宿組合を結成し、組合長としてPRに東奔西走、共同宿泊学習の生徒さんたちを迎えることになりました。土浦一高さんには、1983(昭和58)年から来ていただきました。息子が肝試しで熊の剥製を着て脅かしたところ、女子生徒さんが失神してしまい、ご心配をおかけしましたが、皆さん素直で明るい生徒さんばかりで、こちらが嬉しくなりました。さらに一高さんが共同宿泊をしているという理由で、茨城県の県南地区の高校生や中学生が夏の共同宿泊学習や冬のスキー教室で曾原の民宿組合を利用してくれました。これも一高さんのお陰だと今でも感謝しています。

終戦・復員・民宿開業

1945(昭和20)年8月15日に終戦となり、8月20日にはハンモック一つを持って、実家に復員しました。農業や山仕事、炭焼きなど、実家の仕事を手伝っていました。1949(昭和24)年、22才で結婚、奥様は19才でした。翌年、曾原湖畔の現在地に入植、周囲は背の高い藪だらけで磐梯山も見えませんが、まず畑を開き、小豆、ジャガイモから栽培していきまし。さらに水田をつくり、稲作を始めました。寒さで種籾さえ取れない年もありました。冬は玄関先からスキーで出ていく

始動車でエンジン始動
訓練に励む整備学校生
徒と現在の川崎氏



霞ヶ浦 (その 18) ～陸軍少年飛行兵 1 ; 17 才の飛行兵長～

海軍の「飛行予科練習生(予科練)」制度に次いで、陸軍でも「陸軍少年飛行兵(少飛)」制度が始まりました。1934(昭和 9)年 2 月に誕生した陸軍少年飛行兵は、1945(昭和 20)年 8 月の終戦までの間、第 1 期生から第 20 期生まで 45,000 余名を数えています。彼らは航空部隊の空中勤務者(操縦者、機上機関士、通信士など)や地上勤務者(整備士、通信士など)として下士官の中核となり、日中戦争、ノモンハン事件、アジア太平洋戦争の最前線に従軍し、大戦末期には特攻隊の隊員として散っていった方々も少なくありません。戦没者は 4,500 余名に上っています。

陸軍飛行学校

陸海軍の航空兵力の増強に伴って人材が不足してきたため、早くから操縦技術を習得させ、熟達した操縦要員の養成を図る必要が生じてきました。そこで海軍では 1929(昭和 4)年 12 月、海軍省令により「飛行予科練習生」の制度が設けられ、翌 1930 年 6 月、第 1 期生が横須賀海軍航空隊へ入隊しました。陸軍ではそれより遅れて、1933(昭和 8)年 8 月 1 日、勅令第 68 号「陸軍飛行学校ニ於ケル生徒教育ニ関スル件」が施行され、「航空兵科現役下士官ト為スベキ生徒」として一般および陸軍部内から募集し、試験による選抜のうえ陸軍飛行学校に操縦生徒および技術生徒として入校させました。これが「陸軍少年飛行兵」制度の始まりです。操縦生徒の受験資格は、満 17 歳以上 19 歳未満、技術生徒は満 15 歳以上 18 歳未満(陸軍部内より受験の場合は操縦・技術ともに 20 歳未満)、毎年 1 回入校させ、修学期間は操縦生徒がおよそ 2 年、技術生徒がおよそ 3 年と定められました。

校が開設され、翌 1938 年 8 月には東京府北多摩郡(現在の武蔵村山市)に移転しました(同校の受験資格は年齢が満 15 歳以上 17 歳未満、尋常小学校卒業程度の学力を有する者)。それまで操縦と技術の生徒を別々に採用し教育していたものがこれによつて改められ、採用時には操縦・技術の別なく東京陸軍航空学校(1942 年からは東京陸軍少年飛行兵学校に名称変更)に毎年 2 回入校させ、約 1 年の基礎教育の後に、生徒を適性に応じて操縦と技術、さらに通信の 3 つに分科し、操縦分科飛行兵は熊谷陸軍飛行学校と 1940(昭和 15)年 10 月に設立された宇都宮・大刀洗の陸軍飛行学校の 3 校に分けて、約 1 年間の基本操縦教育を行いました。技術分科飛行兵は、1938(昭和 13)年、陸軍所沢飛行場に新設された陸軍航空整備学校で、通信分科飛行兵は水戸陸軍飛行学校(1940 年からは、水戸市住吉町に新設された陸軍航空通信学校)で、さらに約 2 年間の専門技術教育を受けるようになりました。

陸軍少年飛行兵

陸軍少年飛行兵の採用者数は 5 期生までは、各期とも百数十名から数百名程度でしたが、1938(昭和 13)年に東京陸軍航空学校に入校した第 6 期生からは、1 期あたり千数百名から数千名と大幅に増大しました。1943(昭和 18)年に大分陸軍少年飛行兵学校が開校し、さらに航空要員の急速養成のため、各地に教育隊が設立され、終戦時の第 20 期までに 45,000 余名の少年飛行兵が誕生しました。少年飛行兵は飛行学校を卒業すると、1 年ないし 2 年の専門教育を経て(階級は兵長に進級)、下士官候補者として全国の飛行隊に配属されました(約 6 か月の訓練を受けた後に現役の伍長に任官)。

15 才、訓練の日々

土浦駅前、大和町の川崎自転車店(一高生のみならず、二高、三高など土浦市内の高校生の多くがパンク修理等でお世話になっています)の店主、川崎辰男さんは陸軍少年飛行兵のご出身。2015 年 4 月に高 5 回飯村弘、高 21 回鴻巣茂・松井泰寿がお話をうかがいました。

川崎さんは 1928(昭和 3)年、岩手県胆沢郡前沢町(現奥州市前沢区)の生まれ。実家は農家で兄弟姉妹 8 人の次男坊でした。パイロットへの夢と少しでも両親を楽にしてあげたいとの思いで、1943(昭和 18)年の春、前沢尋常小学校高等科から陸軍少年飛行兵学校を受験しました(競争率 30 倍を超える難関)。採用予定者は、9 月末に東京陸軍少年飛行兵学校に出頭を命じられ、身体検査・適性検査が行われました。合格者は操縦・整備・通信の 3 分科に分けられ、少年飛行兵学校での基本教育 1 ケ年を短縮して、上級学校の各教育隊に配属されることになりました。川崎さんは、もちろんパイロット志望でしたが耳が悪かったため、整備分科専攻になりました。10 月 1 日、所沢陸軍航空整備学校に入校、陸軍少年飛行兵第 15 期生となり、八戸教育隊に配属となりました。10 月 8 日、八戸教育隊に入校、基本教育が 3 分の 1 に短縮されたため、極めて厳しく激しい教育・訓練が行われました。6 時の起床ラッパでたたき起こされ、朝の点呼、掃除。午

前は、軍人基本教育や航空関係各種学科（力学、金属、電機工学、発動機学等々）の座学、午後は、整備実習、機上演習の他、歩兵訓練、射撃、剣術、銃剣術の訓練です。1日の訓練が終わっても、自分の班に戻れば、所有物の整理や洗濯で時間が足らず、衣類の繕いなど、自分のことはすべて自分でやらなければなりません。入浴・夕食後も2時間の自習、10時の消灯ラップとともにそのまま寝込んでしまうという毎日でした。休日にも1〜2日、外出をした記憶はありません。

1944（昭和19）年4月1日、生徒から陸軍少年飛行兵となり、陸軍上等兵に任じられました。6月末まで99式高等練習機を教材として整備教育を受け、7月10日頃から三菱重工業の名古屋工場で、四式重爆撃機の教育実習を受けました。名古屋工場は陸海軍の主力機を作っている大工場で、大勢の工員さんたちに交じり、学徒動員で徴用された旧制中学や高等女学校の生徒さんたちも働いていました。同年9月25日、所沢陸軍航空整備学校を卒業、重爆撃機専攻は浜松陸軍飛行学校で専門教育を受けることになりました。実習で最初に乗ったのが97式重爆撃機、この時の感激は今も忘れられません（10月1日には陸軍兵長に昇任）。

1945（昭和20）年3月末日、浜松陸軍飛行学校を修了。実戦部隊に配属となり、4月1日、東京都の福生飛行部隊（整備学校）に下士官学生として入校。松本飛行場で四式重爆撃機の整備実習を行い、電探（レーダー）の取付作業も行いました。しかし、松本飛行場には兵舎がなく、浅

間温泉の旅館に分泊して、飛行場へ通っていました。

本土決戦部隊

1945（昭和20）年6月30日、福生飛行部隊（整備学校）を卒業すると、重爆撃機の部隊に配属され、機上機関士（航空機関士）として飛行機に乗る隊に所属しました。空中勤務いわゆる「ヒコーク乗り」は、地上勤務の気象とか整備とかに比べて1ランク上に位置しており、食事も航空食が支給され、他の兵隊さんよりは恵まれていました。機上機関士はエンジンやフラップ、車輪、計器など、機体すべてをコントロールするのが任務で、パイロットに準ずる地位にありました。当時の飛行機はパイロット一人では長距離の飛行は不可能で、機上機関士が自機の位置、目的地への方位を確認（風向きによって機体が流れ機体の向きに狂いが生じてきます）、残存燃料も考慮して、パイロットに修正を指示していきます。また通信士も基地から誘導電波を受信し、随時他機との交信をおこないながら、やはり飛行ルートを確認していました。乗務した重爆撃機は中島飛行機製造の一〇〇式重爆撃機「呑龍（とんりゅう）や三菱重工業製造の四式重爆撃機「飛龍（ひりゅう）。いずれも乗員8名で、機長（操縦士）、機上機関士、通信士、爆撃手、銃手で1クルーを編成します。クルーは年令、階級、出身地、みな違いますが、部隊では常に寝食を共にし、基地を飛び立てば死ぬときは一緒、一人のミスが全員の死を招く、一蓮托生の間柄、親子兄弟よりも強い絆で結ばれていました。機長は32才の尉官の方で、歴戦の強者でした。しかし、

機上機関士という役目柄、私が機長に指示をしなければならぬ時もありました。緊張の連続でしたが、機長はほんとうに気を遣ってくれました。今思うと機長も大変だったろうなと思います。

兵長で任官しましたが、まだ17才、部隊には年上の兵隊さんが大勢いました。階級が上ですから、年上の兵隊さんに命令や指示を出さなくてははいけません。機体整備に関する事ならば、多少なりとも専門家ですから、何とかうまく言えるのですが、日常生活の面では、兵隊さんのほうがずっと先輩ですからさうもいきません。入浴の時にも、兵隊さんが階級が上の私に気を遣ってくれるのですが、裸になればこちらはまだ少年の体、向こうは立派な大人の体格です。どうにも恥ずかしくて、あどときほど早く大きくなりたい、大人の体になりたいと思ったことはありません。軍服を着ていれば階級章がついていますから、それでごまかせますが、裸一貫、人間の体というのはほんとうに、その人を表すものだと思いました。

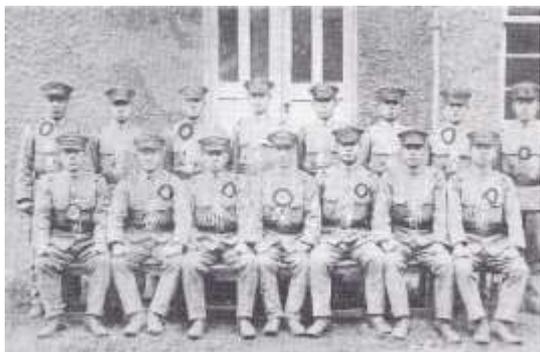
部隊では空襲の合間を縫って連続離着陸の訓練や低空飛行の訓練が行われました。低空飛行訓練は、敵のレーダーに捕捉されないように低空飛行を続ける訓練（当時最新鋭機であった飛龍は雷撃も可能でしたからその訓練でもあったようです）で、高度計のメーター0の超低空で海上を飛び続けます。大波を受ければ即墜落、ひやひやものでした。夜間飛行の時などは海面と空の区別がつかえません。機首が0.1度でも下がっているのに気付かなければ、数十秒後には海面に激突、クルー全員の命が奪われます。

機体の状況を把握するのが私の任務ですから、全神経を目と耳に集中して、計器を睨み、エンジン音や波の音を聞き分けていました。

終戦前には福井県の芦原温泉近くの陸軍三国（芦原）飛行場にいました。福井の市街地が爆撃を受けているのが見えました。こちらは爆撃機です。迎撃にいかず、悔しい思いをしていました。重爆撃機は基地や港湾などの爆撃が任務ですから、外地に行けなくなつた頃から活躍の舞台はなくなりました。さらに私たちの部隊は本土決戦に備えて温存されていたようで、幸い終戦まで生き延びることができました。しかし、基地の将校さんの中には、責任をとられたのでしようか、自決された方もいました。若い私たちはその姿を見て、ただ立ち尽くすだけ、言葉もありませんでした。

※川崎さんは1946（昭和21）年春に復員、1950

（昭和25）年、警察予備隊が設置されたので第1期生として入隊、北海道真駒内の部隊に勤務。機上機関士の経歴を生かして補給処で車輛整備を担当、隊員の指導に当たる任務に従事しました。その後、阿見町の陸上自衛隊武器学校（警察予備隊はその後、保安隊を経て、1954年、自衛隊に改組されました）に派遣され6ヶ月ほどの研修を受けましたが、その時奥様の育子さんと出会い、ご結婚、奥様の実家の自転車を継ぐことになりました。1985（昭和60）年からは茨城県自転車二輪自動車商協同組合の理事長に就任され、現在も理事長として、組合の振興、自転車安全利用促進事業や防犯登録事業などの推進に力を注いでおられます（その間全国組合の理事長も2期6年間務められました）。



陸軍少年飛行兵1期生 偵察専攻生徒(下志津飛行学校入校式)
前列右端が片岡喜作、中央が鈴木武次良、左端が古賀克己の各氏

振武特別攻撃隊長1 ～少年飛行生徒から飛行隊員、そして飛行学校教官～

海軍航空の町であった土浦。市内を闊歩する予科練生や霞ヶ浦海軍航空隊士官の制服姿を目にして土浦中学生。海軍士官学校や予科練を受験する生徒が出てくるのは当然の理でした。しかし、1931(昭和6)年の満州事変以降、陸軍の動向が世の注目を集めるようになると陸軍士官学校や陸軍飛行学校へ進む生徒も増えてきました。本号から、陸軍少年飛行兵第1期生として所沢陸軍飛行学校に入校、日中戦争で中国大陸を転戦後、飛行学校教官から第81振武特別攻撃隊長として沖縄で散華された片岡喜作氏(中学33回)の足跡をたどってみます。

誇りを胸に

片岡喜作氏は1915(大正4)年6月、片岡鉄造・しか御夫妻の二男として、つくば市玉取に生まれました。大曾根尋常高等小学校を卒業し、1929(昭和4)年4月、旧制土浦中学に入学。5年間玉取の実家から自転車通学。学校から帰るといつも離れの書齋で勉強をしていました。長身ですらりとした体格、無口でしたが、優しく、2人の妹(現飯田きよさん・沼尻まささん)思いの兄さんでした。中学卒業を1ヶ月後に控えた1934(昭和9)年2月1日、陸軍少年飛行兵第1期操縦生徒として、所沢陸軍飛行学校(現在は防衛医科大学が所在)に入校。応募者は操縦生徒が336名(定員70名の約48倍、茨城県からの合格者は2名)、技術生徒が639名(定員100名の約64倍、茨城県の合格者は3名)という難関でした。

飛行学校での生活は、5時30分の起床から21時30分の消灯まで、予科練同様分刻みの日課が組まれ、息つく暇もない毎日でしたが、生徒たちは少年飛行兵の誇りを胸に、厳しい教育・訓練に挑んでいきました。その結果、1年ほどで単独飛行ができるようになり、1935(昭和10)年3月15日の「いはらき新聞」には、「所沢少年航空兵 猛練習 偵察訓練飛行」との見出しで「所沢飛行学校少年航空兵生徒の操縦教育は狭山飛行場において練習実施されているが、各生徒の上達振りは著しく、既に練習機の単独飛行を終わつたので、来る15日より乙式一型偵察機の訓練飛行に移るため、第一班生徒30名は教官亀山大尉が引率して各務ヶ原飛行場に出張し、来る4月20日まで同地に滞在して猛練習を行うこととなった。」との記事が掲載されています。

片岡生徒は偵察分科専攻(他は戦闘分科と爆撃分科)となり、1935(昭和10)年11月27日、優秀な成績で所沢陸軍飛行学校を卒業、12月1日配属先の滋賀県八日市の陸軍飛行第3連隊から、千葉県下志津陸軍飛行学校に派遣され、同校に入校、空中偵察に関する実戦教育を受けました。

日中戦争、死闘30分の空中戦

1936(昭和11)年2月27日(二二六事件の翌日)に同校を卒業、伍長に任官し、陸軍飛行第3連隊第1中隊に復帰。同期生の鈴木武次良伍長は第2中隊、古賀克己伍長は第3中隊でした。この八日市での生活を後年、鈴木武次良氏は次のように記しています。

「私どもは自分の愛機(88式偵察機)を操縦して琵琶湖上空狭しと飛びまくった。3人揃っての外出となると町中の女生の憧れの的で、もてたものだった。1937(昭和12)年9月9日、(7月に勃発した)日支事変(日中戦争)のため第3連隊に動員令が下命された。思えば着任以来、八日市の三羽鳥として羨望された僅か1年半が私どもの青春時代であったとは……」(『陸軍少年飛行兵史』操縦1期生徒の歩み)より

片岡伍長も飛行第3連隊で編成された飛行第7大隊の隊員として天津に進出、軍曹に昇進し、中国各地を転戦、大空の戦いに挑んでいきました。

なかでも、1938(昭和13)年5月、徐州攻略作戦に参加、15キロ爆弾を搭載した88式偵察機で徐州停車場を爆撃、その後の敵偵察中に騰県上空で敵戦闘機(イ15号機)5機の攻撃を受け、同乗の大内少佐は旋回機銃で応戦、さらに伝声管を握りしめて操縦士の片岡軍曹に飛行コースを指示し続けましたが、8発の機関銃弾を

受けて壮烈な戦死。しかし片岡軍曹は巧みに機を操り、超低空飛行、旋回に次ぐ旋回で敵機を振り切り、見事に基地に帰還したことは、特筆に値する戦功でした。機体、機翼に100余発の敵弾を受け、翼は滅茶滅茶に壊れていました。その翼の裏側には低空飛行の際に木立でこすった痕が無残に残り、飛行機の命綱ともいえる操縦索は半分ほど切れていました。30分間の死闘を物語る惨憺たる姿の片岡機でしたが内地に運ばれ、天覧の栄に浴しました。さらに、終戦まで所沢の航空資料館に展示され、御両親も見学に赴いています。

1938(昭和13)年8月には飛行第7大隊が飛行第75戦隊に改編され、漢口作戦、奥地侵攻作戦(重慶、宜昌等)及び敵航空基地攻撃等に参加、激戦を戦い抜いてきました(1938年9月29日には陸軍歩兵であった長兄盛之亟さんが中国戦線で戦死されました)。

渾身一体

飛行第75戦隊は武昌飛行場に前進し、片岡曹長(1938年に昇進)も第一線で戦い続けましたが、病を得て1940(昭和15)年4月に帰国、熊谷陸軍飛行学校付教官(助教)となり、後輩となる少年飛行兵たちの教育に当たることになりました。

熊谷陸軍飛行学校で片岡曹長が助教として最初に担当したのが、陸軍少年飛行兵第6期生の4人でした。着任の日に片岡曹長は4人を集めて、「今日、命によって4人の操縦教育を受け持つことになった。自分は今までずっと戦地にあつて御奉公していた者で、この度帰還して学校付となった片岡である。皆と同じ少年飛行兵1期出身である。助教としては初めであるから充分指導できないかも知れ

ないが、戦地で鍛えた熱と意気とで皆を教育してゆくつもりである。皆も助教と渾身一体となつて精進することを希望する。」と挨拶されました。その4人の生徒の1人であった田村恵治氏はその時の印象を、「助教殿の眼に底力があつた。なるほど戦場を駆け巡つてこられた人だけはあると思つた。」と記しています。片岡曹長は決して荒々しい言葉で注意することはなく、懇切に生徒達が解るまで説明指導していきまされた。そのため、生徒たちは先輩から操縦教育を受ける事ができるのが非常に嬉しく、大きな希望を持つて教えを受けていました。田村氏は、片岡曹長と渾身一体となつた精進の日々を次のように記しています。

私は5年5ヶ月の操縦生活中、片岡曹長のような立派な先輩に出会つたことがない。〔『陸軍少年飛行兵第6期会報』〕。4人の生徒と別れた後、片岡曹長は熊谷陸軍飛行学校館林分教場付教官となり、軽爆撃機専攻生徒の教育に当たつていましたが、同年12月に少尉候補者学生(21期生)として所沢の陸軍航空士官学校に入校しました。翌1941(昭和16)年7月同校を卒業すると、銚田陸軍飛行学校に尉官学生として入校し、主として軽爆撃機あるいは襲撃機を専修しました。

「助教殿は偵察機から軽爆撃機に転科されてからも幾度か赫々の武勲を立てられた。しかしどんな時でも決して威張ると云う事がなく無口の人だったが操縦技倆は抜群だった。特殊飛行などは始めてであると云われながら我々に立派な模範を示され教育された。しかし、ようやくにして助教殿と我ら4人とが胸襟を開くようになつた時、哀しくも別れなければならなくなつた(飛行学校が各分科ごとに独立することになり、片岡曹長は軽爆撃機に、4人の生徒は重爆撃機に行くことになつたため)。6月22日に最後の挨拶と注意をされたとき、助教殿はさすがに別離の辛さを思われたのか、顔にも言葉にも真剣なものがあつた。我ら4人も目頭が熱くなつて来た。お礼を述べる吉原の声も震えていた。我らは溢れる涙をじつと堪えて無言で助教殿の顔を見つめていた。私が操縦を習い始めた時、1期生片岡曹長に出会い、教えを得たことは今でも無上の幸福者であつたと思つている。

熊谷陸軍飛行学校

昭和9年8月、熊谷陸軍飛行学校、所沢航空技術学校が創設され、陸軍少年飛行兵操縦生徒は、2期生より熊谷飛行学校に移転し、操縦訓練を受けた



88式偵察機：昭和3年採用。満州事変から日中戦争初期まで活躍し、昭和初期を代表する陸軍機で、生産機数1,117(含軽爆型)は当時の国産機としては破格の数を誇る。
エンジン：川崎一式450馬力発動機(BMW-6)水冷V型2気筒 速度：最大220km/h
航続時間：最大6時間 武装：7.7mm後方旋回機銃1(軽爆型の爆弾最大200kg)

銚田陸軍飛行学校

陸軍における航空爆撃の教育と研究は当初、所沢の陸軍飛行学校で行われてい

ましたが、1925(大正14)年5月、陸軍初の爆撃隊として飛行第7連隊が浜松に設立されると、同連隊内の練習部で行われるようになりまし。しかし1933(昭和8)年に浜松陸軍飛行学校が開設されたため、爆撃に関する教育と研究は同校で行われるようになりまし。この間、重爆撃機(大型で1トン程度までの爆弾を搭載でき、航続距離も長い爆撃機)と軽爆撃機(中型か小型で爆弾搭載量は500kg程度と小さいが、軽快な運動のできる爆撃機)に器材、用法の違いはあつても、同一の飛行場で訓練を実施してきまし。しかし学生の増員に伴つて使用機が増え、訓練空域も狭く支障をきたすようになりまし。そのため1940(昭和15)年12月に浜松陸軍飛行学校内に銚田陸軍飛行学校を併設し、重爆分科と軽爆分科とに分離し、翌1941年1月、銚田陸軍飛行学校を茨城県鹿島郡(現銚田市大竹)に移転、独立させ、銚田を独立した軽爆専門の学校としまし

た。飛行学校および飛行場は、北浦と太平洋の鹿島灘に挟まれた広大な地域に設けられ、敷地となる山林および耕地の大半は買収され、住民は移転を余儀なくされました。銚田陸軍飛行学校では、軽爆撃飛行隊幹部の訓練が行われていましたが、アジア太平洋戦争の戦局が厳しくなると、1944年(昭和19)年6月、銚田陸軍飛行学校は銚田教導飛行師団に改編され、従来の学生教育に加え、敵機来襲の情報があれば直ちに攻撃の体制をとることになりました。10月22日には、教官や助教によつて陸軍初の特別攻撃隊が編成され(隊長は岩本益臣大尉)、10月末にルソン島へ進出

現地地「万朶(ばんた)隊」と命名されました。11月12日、海軍の神風特攻隊に遅れるこ

と3週間の後に4機が初の特攻出撃を行い、以後12月までレイテ湾への出撃を続けまし。万朶隊の特別攻撃は、地元の人々に大きな反響を巻き起こしました。鹿島郡常会では「特攻隊の偉業に続けと60機建造貯蓄運動」を展開し、目標達成決議を行つています。また銚田国民学校では朝礼時の挨拶の言葉を従来の「く」をしっかりと「から」を体当たり」に改めました。万朶隊に続いて、1944(昭和19)年のうちに、第5・第8・第11八紘隊が特別攻撃隊として編成されましたが、その中には、戦地まで赴き整備や通信の任務につく軍属も含まれていました。

1945(昭和20)年には、銚田陸軍飛行学校に関する特攻隊として、第45・第63・第64振武隊、第201・第255神鷲隊が編成され、出撃した兵士の多くが沖繩海上や鹿島灘東方洋上で散華しました。

同年7月には銚田教導飛行師団は作戦任務の第26飛行団と教育研究任務の第3教導飛行団に再度編成替えになりましたが、8月15日に終戦となり、銚田陸軍飛行学校は開校以来4年余りで閉校となりました。(高21回 松井泰寿)

参考

- 『紺碧のあなたに 特攻戦死者の記録』(群馬県少飛会編 1993年発行)
- 『血戦 部隊長の手記』(時代社 1941年発行)
- 『銚田市史 通史編下巻』(銚田町史編さん委員会 2001年発行)
- 『茨城県の戦争遺跡』(伊藤純郎編 平和文化 2008年発行)

土浦市立博物館テーマ展案内
「戦争の記憶」

—土浦ゆかりの人・もの・語り—
12月6日(日)まで



館林分教場整備隊兵舎 飛行訓練の合間に航空体操をする特攻隊員。終戦後、兵舎は関東女子専門学校(元関東学園大学附属高等学校)に払い下げられ、他は農地や工業団地などになった。館林市史編纂委員会『写真で見る館林』より

振武特別攻撃隊長 2 ～飛行学校教官から特攻隊長へ～

1941(昭和16)年11月に銚田陸軍飛行学校を卒業し、再び教官に復帰した片岡中尉は、館林市大街道の泉重子さんとご結婚、二人の娘さんをもうけられました。しかし、1944(昭和19)年に入ると、戦局は悪化の一途をたどり、1945(昭和20)年2月、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖、教育隊は第6練習飛行隊(東部540部隊)に改編されました。同年3月11日には第6練習飛行隊上田教育隊において、同隊の教官及び助教を隊員にして特別攻撃隊が編成され、片岡中尉は隊長に任ぜられました。

言行一致、死を教える

熊谷陸軍飛行学校は、所沢陸軍飛行学校の操縦生徒の教育を行うため、1935(昭和10)年12月に開設されました(所沢陸軍飛行学校第2期生から移駐)。学校本部および本校は埼玉県大里郡(現在の熊谷市西部、現航空自衛隊熊谷基地)に置かれ、少年飛行兵、特別操縦見習士官(注1)、あるいは将校、下士官の操縦学生などに対し、飛行機操縦の基本教育を実施していました。熊谷陸軍飛行学校は本校のほかにも、壬生陸軍飛行場(栃木県下都賀郡)、下館陸軍飛行場(茨城県真壁郡)、館林陸軍飛行場(群馬県邑楽郡)、桶川陸軍飛行場(埼玉県北足立郡)、松本陸軍飛行場(長野県東筑摩郡)、上田陸軍飛行場(長野県上田市)、伊那陸軍飛行場(長野県伊那市)など、各地に所在する既存あるいは新設の陸軍飛行場に分教場(分教所)を設置し、操縦教育を行っていました。

1941(昭和16)年7月に銚田陸軍飛行学校に入校した片岡曹長は、同年11月に同校を卒業し、少尉に任官、熊谷陸軍飛行学校館林分教場(教育隊)付教官に復帰し、再び飛行兵の教育を担当することになりました。

昭和19年5月末に第3期特別操縦見習士官として熊谷陸軍飛行学校に入校し、館林教育隊で訓練を受けた土田直鎮氏(つちだなおしげ)大正13年生まれ・東京大学国史学科卒・東大教授・東大史料編纂所所長・国立歴史民俗博物館館長・日本古代史。平成5年歿は、館林教育隊での訓練と片岡教官を次のように記しています。

「飛行機に乗る以上、先に死が待っているのは常識であったが、飛行学校の教育は厳しかった。『お前たちは消耗品であ

る』という一言に始まる訓示を皮切りに、死ぬことだけが生き甲斐といったような訓練がつづいた。覚悟はしていたものの、死ぬのも並大抵のことではないと思ったりしたものである。(中略)

以後、数個の教育隊を廻ったが、最も厳しかったのが館林教育隊であった。ここは徹底して消耗品速成教育を施した隊で、一切の娯楽を禁じた。面会なし、外出なし、酒保なし、十日に一度の休務と称する日も、午前中は体育でしぼり、昼食から夕食までが唯一の休憩時間で、この間は洗濯・修理や散髪、諸手入れなどの内務整理に追われる。家族の写真もお守りも、千人針も、マスコットもすべて禁止、家族からの検閲済みの葉書三枚以下の所持だけが認められ、頻りに検査があった。写真撮影などは論外である。だから私には、世間にあるような飛行服姿の写真は勿論、隊での写真は一枚もない。どうせ死ぬときまわっている者が、何で人に姿を見せる必要があるか、黙って死ぬというのが趣旨であった。(中略)

今から思えばまったく非情な世界であったが、この中で我々に本当に死ぬ気を感じさせたのは、館林教育隊の私の教官であった。

第1区隊長で、片岡喜作という中尉である。少年飛行兵第1期の出身であるから、30才ぐらいではなかったかと思うが、口数のいたって少ない、派手なところの少しも見えない、つねに厳然たる態度の将校で、いかにも自らを鍛え抜いて来たという感があった。偵察機出身だけに技量抜群で、大陸転戦中に病を受けて内地の教官などを勤めていたのであったが、この教官が学科の時間中、ふとしみじみ

とした面持ちで、『お前たちは支那に行ったら絶対生水を飲むな。俺は支那であまり喉が渴いてただ一回、生水を飲んだために、こんな体になってしまっただけで奉公ができないのだ。残念でたまらぬ』と述べた。『将校は瘦我慢の連続である』と、我々に教えていた教官であるから、黙って耐えていたのである。この教官は言行一致して実に淡々と死を伝えてくれた。

『お前たちも早く上達したいと焦っているようだが、気に病んではならぬ。お前たちは最後には離陸さえできればよい。爆弾を積んで離陸さえすれば、俺が敵の見える所へ連れて行ってやるから、そこでぶつかればよい。それでお役に立つことができるのだから、安心して練習せよ』と、教えてくれたのもこの教官である。我々幼稚園クラスの者が戦うには、ただぶつかるとは方法がないことは自明であったから、教官のこの言葉は我々に大きな安心感を与えた。(東大十八史会編『学徒出陣の記録』あるグループの戦争体験 中公新書 1968(昭和43)年刊)

家族とのひととき

片岡中尉は館林教育隊の教官在任中、下宿先(館林市大街道の泉家)の娘さんであった重子さんとご結婚され、二人の娘さんがお生まれになりました。その泉家の隣町台宿にお住まいで、泉家の方々と家族ぐるみのお付き合いをしていたのが、奥(旧姓関口)純子さんでした。純子さんは当時館林の女学生で、片岡中尉ともたびたび顔を合わせていました。純子さんは後年、片岡中尉のことを「最初

は無愛想に見えて、自分は嫌われているのではないかと思つたほどでした。しかし、しばらくすると、言葉数は少ないけれど心根の優しい、立派なお方だとわかり、心打たれるものがありました。」と、孫の針ヶ谷穂高氏に語っています。片岡中尉は自分の妹たちと同じ年頃の純子さんを他人とは思えなかったのか、妹同様に接していたようです。純子さんも兄さん(昭和19年。ペリユリニュー島で戦死)と年齢も近いためにより一層親しみを覚えていきました。

また片岡中尉は、飛行学校生徒の頃は夏冬の休み、教官時代には休暇を利用してしばしば実家に帰っていました。特に二人の妹、きよさん、まささんと過ごすのがより嬉しかったようです。夜遅く実家に着いた時などは、すでに寝ている二人の間にもぐりこんで、一緒に寝ていました。二人も喜作兄さんが大好きで、下の妹のまささんは、小学校の頃まで喜作兄さんと一緒に寝ていました。実家に帰れない時でも、夏にはセーラー服、冬にはセーターが届きました。帰隊する際に、二人を東京見物に連れて行ってくれたこともありました。二重橋や浅草を見学し、松坂屋で買い物をしてくれ、カツサンドイッチをご馳走になりました。上野駅で「荒川沖の次の土浦で下車しなさい。」と見送ってくれましたが、その時の少々心配そうな顔は今でも忘れられないそうです。

きよさんが大曾根小学校高等科の時には、空から妹さんたちに会いに来たこともありました。大曾根小学校の上空で飛行機が低空飛行を始めたので、全校生徒が校庭に飛び出しました。ものすごい爆

音にびっくりしながら飛行機を見上げてみると、先生が肩を叩いて「喜作兄さんだよ」と教えてくれました。大人たちは喜作さんの訪問飛行を前もって知っていたようです。片岡機はしばらく旋回飛行、両翼を揺らしての挨拶の後、通信筒を落とし、飛び去っていききましたが、その通信筒は村の人が片岡家へ届けてくれました。一方、家族も片岡中尉の勤務地を訪ねて行きました。二人は母親のしかさんに連れられて、所沢や館林、松本を訪ねています。また父親の鉄造さんは、自転車の荷台に実家で穫れた作物を一杯積んだ上に、お腹にお餅を巻き付けて館林まで出かけていきました。

西筑波陸軍飛行場跡

(陸軍挺進滑空飛行第一戦隊発祥の地記念碑)
1940年開設。1942年蘭領バレンバンに投入された落下傘部隊の訓練基地。滑空飛行(グライダー)部隊発祥の地。訓練の様子は、詩人竹内浩三(1945年フィリピンで戦死が訓練中に綴った『筑波日記』)に見られる。



館林飛行場 1938年に熊谷陸軍飛行学校飛行場として開設。1945年からは第1航空軍第170飛行場大隊が所在し、特別攻撃隊(19隊122名)の教育基地。特攻訓練実施も出撃機会なく終戦。写真の左端;格納庫、写真の右側のテント;隊員の待機所 館林市史編纂委員会『写真で見る館林』より

家族との別れ

1944(昭和19)年11月、片岡中尉は熊谷陸軍飛行学校松本教育隊付教官に任ぜられ、妻子とともに松本に赴任しましたが、翌1945年2月、内地航空教育隊を実戦部隊第6航空軍)に改編する命令が下され、熊谷陸軍飛行学校は閉鎖、教育隊は第6練習飛行隊(東部540部隊)に改編されました。同年3月11日、第6練習飛行隊上田教育隊において、同隊の教官及び助教を隊員にして特別攻撃隊(第81振武特別攻撃隊)が編成され、片岡中尉は隊長に任ぜられました。片岡中尉は隊員たちとともに特攻訓練基地となった熊谷に移動、熊谷航空隊では、超低空飛行やエンジンを全開にして、目標の吹き流しめがけて急降下し、急上昇を繰り返す訓練が続けられました。

その間に片岡中尉は、実家の玉取を訪れ、最後の別れを告げています。その時の様子をきよさんとまささんは次のように語ってくれました。

「特攻出撃前の4月初めだったと思います。熊谷航空隊から作谷の西筑波陸軍飛行場(現つくば市作岡)まで飛んできて、飛行場からは自転車でやって来ました。私たちは知りませんでした、松本から玉取へ移っていた奥様や子供たち、両親や家族に最後の別れを告げに来たのです。私たち二人を連れて、一ノ矢の八坂神社に行きましたが、何も言わず無言で参拝をしていました。実家には一晩泊まって、翌日帰隊しましたが、作谷までは父親が自転車で送って行きました。作谷を離陸すると、実家の上空を低空飛行して、ハンカチを落とし、母校土浦中学のゴシック式校舎の上空から、西の空に消えてい

きました。それが喜作兄さんとの永遠の別れになりました。」

片岡中尉は、両親と奥様には特攻隊長に任ぜられたことを報告しました。その際に母親のしかさんから「戻ってくることはできないのか。」と尋ねられましたが、「そういうわけにはいかないのだ。」と答えたそうです。その時、中尉は「自分の隊の隊員は皆、操縦技術抜群の歴戦の勇士、体当たりなどしなくても敵空母の飛行甲板に250キロ爆弾を命中させて帰還し、さらに出撃を続けられるのに、そうもいかんだ。」と言いたかったのではないのでしょうか。片岡中尉は熊谷基地に戻ると『留魂録』(注2)に「謝不孝 祈健斗 就征空昭和二十年四月六日 片岡喜作」と記しています。

※注1 特別操縦見習士官(略して特操、国民一般には学驚の愛称で呼ばれた。)

※注2 『留魂録』(靖国神社遊就館蔵) 片岡中尉が特攻隊長に任命されてから小月基地(現山口県下関市、海上自衛隊航空基地)出發までの間に、その決意や心境を記したためのもので、第6航空軍司令官や隊員たちの寄せ書きも記されています。出撃後に遺書とともに遺品として小月基地から重子夫人に届けられ、重子夫人は平成6年7月14日、これを靖国神社に奉納されました。

A c a n t h u s

第 8 6 号

平成 2 8 年 1 月 1 2 日

茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

H P http://www.sin-syu.jp/

振武特別攻撃隊長 3 ～第 81 振武特別攻撃隊出陣～

1945(昭和 20)年 3 月 11 日、第 6 練習飛行隊(東部 540 部隊)上田教育隊において、第 6 練習飛行隊の教官及び助教を隊員として、特別攻撃隊が編成され、片岡喜作中尉(中学 33 回)は隊長に任ぜられました。隊員は片岡隊長以下 12 名、いずれも操縦技術熟達の強者でしたが、特攻機は 250 キロ爆弾で爆装した 99 式高等練習機でした。隊員たちは原隊(熊谷航空隊)で特攻訓練を受け、出陣式後、山口県小月飛行場に進出、出撃命令を待っていました。(本紙では戦後 70 年の昨年から戦争に関わった先輩方の足跡を追っています。)

見送り

1944(昭和 19)年に入り、戦局がますます厳しくなると、女学生達も勤労動員となり、奥(旧姓関口)純子さんたちも館林航空器材株式会社や太田市の中島飛行機の工場などで働くことになりました。翌 1945 年に入ると、空襲が激しくなり、太田はもちろん館林も空襲を受けるようになり、純子さんたちは毎日工場に出勤し、機銃弾などの製造に従事していましたが、4 月初旬「明朝、特攻隊員の見送りが館林駅で行われる。」との知らせが入りました。翌朝、勤労動員の出勤前に同級生たちと駅前に行くと、近所の人たちが集まっており、そこに片岡中尉の姿がありました。泉家で顔を合わせた時には、特攻で出撃することなど思いもよらないほど、温情に溢れた穏やかな様子でしたので、純子さんは「片岡中尉が行くんだ。」と驚きのあまり声が出ませんでした。見送りの方々への挨拶を終えると、片岡中尉は純子さんの前に来て、「勤労動員などつらい思いをさせてしまつて申し訳ない。命に代えて敵を滅ぼし、平和な時代を築き上げるから、もう少し我慢して下さい。」と頭を下げ、車中の人となりました。その優しいまなざしは、これから特攻で死に赴く人にはとても思えなかつたそうです。

また第 3 期特別操縦見習士官として、館林教育隊で片岡中尉から薫陶を受けた大野俊康氏(元靖国神社宮司・昭和 19 年 6 月 1 日、熊谷陸軍飛行学校へ入校)は、1993(平成 5)年 6 月に奥様の重子様から伺った話として「特攻隊長の命を受けた時、既に 4 歳と 3 歳の女の子がおり

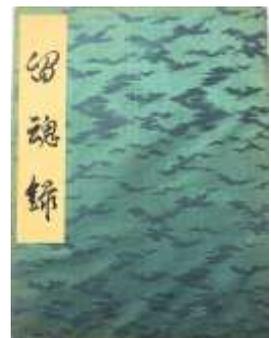
ました。そして私は身重で臨月になっていました。片岡は別れる時、『本当にいろいろよくやってくれた。私は思い遣すことはない。ただ、おなかの子供だけは気にかかると言っています(特攻魂のままに)』元靖国神社宮司大野俊康講演集・展転社)。

同期生との出会い

1945(昭和 20)年 4 月 7 日夜、片岡中尉は『留魂録』(靖国神社遊就館蔵)に特攻隊員 12 名の氏名・階級と「諸事完了 純一無難 訓練基地発前夜 片岡喜作」の語を記し、翌 4 月 8 日、熊谷飛行場を出陣。同日經由地の兵庫県加古川飛行場に到着しましたが、そこでは同期の鈴木武次良中尉との出会いがありました。鈴木中尉は中国戦線から帰国後、熊谷陸軍飛行学校付となり、伊那分教場教官を務めていましたが、第 6 航空軍隷下の通信司令部の飛行班長として福岡県板付飛行場に赴任するところでした。鈴木中尉はその時の様子を次のように記しています。

「大阪が敵の空襲に遭い、その後、偶然にも加古川飛行場で同期の片岡中尉の特攻隊の宿泊を知り、宿を訪ね激励する。驚いた事には隊員全員、伊那分教場時代の私の部下で編成されていた。牟田少尉の如きは、さつそく棋盤を持ち出し教育一石と…私は心して負けた。また松田曹長はお産 3 日目まで出て来たとか何と言つて来た?」「『遠い所に行つて来る。』と唯一言云つて来た」と涙ぐむ。(少年飛行兵)後輩の難波曹長は 1 日も早く突つ込みたい。どんな慰問をされても何馳走をされても、面白くも、うまくも何

ともない…と。」「陸軍少年飛行兵史」操縦 1 期生徒の歩み)



「留魂録」(靖国神社遊就館蔵・縦 23.3 cm 横 17.8 cm) 片岡中尉が特攻隊長に任命されてから小月基地出發までの間に、その決意や心境を記したためたもので、第 6 航空軍司令部や隊員たちの寄せ書きも記されています。出撃後に遺書とともに遺品として小月基地から重子夫人に届けられ、重子夫人は 1944(平成 6)年 7 月 14 日、これを靖国神社に奉納しました。

第 81 振武特別攻撃隊・留魂録

4 月 9 日、特攻隊の集結基地となっていた山口県小月飛行場(現海上自衛隊小月航空基地)に到着、4 月 12 日には菅原道大第 6 航空軍司令官より「第 81 振武隊」の命名を受けました。隊員は以下の 12 名でした。

- | | | |
|-----------|------|-----|
| 片岡喜作中尉(※) | 29 歳 | 茨城 |
| 牟田芳雄少尉 | 24 歳 | 佐賀 |
| 牛渡俊治少尉 | 22 歳 | 宮城 |
| 大場健治准尉 | 29 歳 | 宮城 |
| 松田富雄曹長 | 28 歳 | 宮城 |
| 難波隼人曹長 | 23 歳 | 岡山 |
| 仲本政好曹長 | 25 歳 | 鳥取 |
| 桐生 猛曹長 | 22 歳 | 静岡 |
| 橋本榮亮軍曹 | 21 歳 | 福井 |
| 白石哲夫軍曹 | 25 歳 | 大分 |
| 岡山勝己軍曹 | 24 歳 | 鹿児島 |
| 鍋田茂夫伍長 | 24 歳 | 神奈川 |
- 片岡隊長は同日付けの『留魂録』に、



片岡中尉が小月基地でお世話を受けた「員光下組婦人会」の方々に贈った書「神機到来す、必死を以て、人機命中、空母轟沈を期す」

「期団結振武隊 出撃ヲ前ニシ
隊長 片岡喜作 (昭三十一令
茨城県筑波郡大穂村字玉取

父 片岡鉄造
母 片岡しか
妻 片岡重子

と筆を下ろし、以下隊員11名それぞれの本籍地・年令・父母妻の名を書き連ね、最後に「大君の御為に散る 第八十一振武特攻隊一同」と揮毫、『留魂録』を結んでいます。

片岡隊長はこの『留魂録』を小月基地出撃に際し、遺品として重子夫人に送りましたが、その行間には、片岡隊長をはじめ隊員たちの「たとえ身は散華しようとも自分たちの魂は家族のもとに留まっている」との思いが溢れています。

心からのもてなし

小月基地待機中(4月9日〜20日)多忙を極めた片岡隊長でしたが、特攻基地知覧進出までの間、心洗われるような毎日が続きました。その一つが樫出勇(かいでいむ 1915年〜1994年)中尉との再会でした。樫出中尉は陸軍少年飛行学校同期生(1期生)で、同じ第1区隊に所属し、片岡隊長は第1班、樫出中尉は第2班でした。その後片岡隊長は偵察、樫出中尉は戦闘分科に進みました。さらに陸軍航空士官学校でも二人は少尉候補生21期学生として同期となりました。当時、樫出中尉は飛行第4戦隊に所属、小月基地で北九州上空の守りについており、二式複座戦闘機(愛称「屠龍」)を駆り、B29を22機撃墜し、「撃墜のエース」と呼ばれていました。航空士官学校卒業以来の再会を果たした二人は、飛行学校での思

い出、そして過ぎし日々の思い出の数々を語り合い、さらに祖国を思う互いの胸中を吐露して感無量、話が尽きるこ



小月基地で打合せ中の飛行第4戦隊の隊員たち。
機体は2式複座戦闘機「屠龍」

とはありませんでした。樫出中尉は戦後、その時の様子を「征きて帰らぬ出撃に一点のゆるぎもみせぬ片岡隊長の姿に、神を見る思いであった。」と述べています。

また小月基地での約10日間の待機中、第81振武隊の隊員たちは基地近くの王司温泉に宿泊していました。附近の村民は心からのもてなしを尽くしてくれました。そのもてなしを片岡中尉は奥様に宛てた遺書のなかで、「当山口県小月飛行場に於いて約10日間待機、附近の村民各位より誠心のもてなしを受け本当に幸福に征きます。その状況は宿舎附近に居られる豊島とし子様、桜井朝子様、西山の奥様より貴女にお知らせ下さる筈です。」と伝えていきます。

4月12日には下関市員光町(なみちまち)地区の婦人会(員光下組婦人会)会員が慰問に訪れました。その時の様子を同婦

人会会員であった松田セツさんは、1987(昭和62)年9月7日の朝日新聞下関版で「慰問した日、温泉近くの神社の境内で八分咲きの桜を一枝、片岡隊長に差し上げたところ、隊長は桜の枝を片手に持ち、吟詠しながらひと舞いされました。宿舎には20才前後の隊員が14〜15人いましたが、生きて帰れる望みもなく出撃していく若い隊員たちが気の毒で、何を話せばよいやら分かりませんでした。」と語っています(『特攻隊戦没者慰霊顕彰会会報第5号』より引用)。この慰問に対して、隊長片岡中尉と副官大場健治准尉は漢詩と短歌の辞世の書を贈りました。この時贈られた書は、松田さんが41年間保管していましたが、元気なうちに遺族にお返ししたいと、朝日新聞下関支局に調査を依頼、その結果、遺族の所在が判明し、片岡中尉と大場准尉の遺族のもとに、それぞれ朝日新聞社を通じて届けられました(1987年9月17日の朝日新聞には「出撃前の辞世の書41年ぶり、遺族の手に」との記事が掲載されています)。

また同婦人会会員であった豊島とし子さんは、「ひとたび征けば二度と還らぬ必死必滅の特攻攻撃、婦女子の故に共には征けぬが、我が心は己が魂は相共に」との熱烈たる思いで、指を切り滴る鮮血を以て「祝出陣 祈成功 振武隊 山櫻萬歳! とし」と記した絹布のマフラを隊員一同に贈っています。(マフラの右下には片岡隊長が書いたと思われる「左記の乙女より隊員一同に贈らる 於基地 山口懸下関市王司区員 光町 豊島とし子」との添え書きがあり、出撃後片岡中尉の遺品として、重子夫人

のもとに届けられ、重子夫人が1994(平成6年)6月10日に靖国神社に奉納しています。)



血書のマフラー
(靖国神社遊就館蔵)

村民から真心籠るもてなしを受けた隊員たちでしたが、ついに出撃命令が下り、4月22日、知覧基地から沖繩へ出撃することになりました。片岡中尉は命令を受けると、郷里玉取に居る両親や奥様に「待望の時機来たりて 本日〇〇(機密保持のため特攻の2文字が伏せ字になつていきます)下命 愛機を操つて勇躍 制空の途につかんとす 兄と共に故郷の名を辱めざらん事を期す 委細後報 不備(文意が十分でない)という意で、手紙文の最後に添える語」との一報を送っています。(高21回 松井泰寿)

(※)片岡中尉の年齢について、本文中、29歳と31令の二つがありますが、これは片岡氏本人が当時一般的であった「数え年」で自らの年齢としたものと、戦後に年齢を言う際に現在の一般的な「満年齢」で表記したものが混在しているためです。片岡氏は91(大正4)年6月生まれですが、数え年年齢では誕生と同時にすでに1歳で、正月を迎えるたびに年齢を1歳重ねますので、翌大正5年1月1日になれば2歳になります。満年齢では、大正5年1月1日では0歳(6か月)で、数え年とは2歳の差が出てしまいます。大正5年6月には1歳となり、その差は1歳です。ですから、194(昭和20)年4月時点では、数え年で31歳、満年齢で29歳ということになります。



片岡喜作隊長

振武特別攻撃隊長4～出撃前夜～

知覧基地への進出を翌日に控えた4月19日夜、隊員たちは、NHK小倉放送局の取材を受け、その心境や決意を語っています。放送は隊員が出撃、散華された後の5月10日夜、「出陣前夜の決死の声」との番組名で九州全域にラジオ放送され、それを西日本新聞が5月11日の朝刊で報じています。

出撃前夜の決死の声

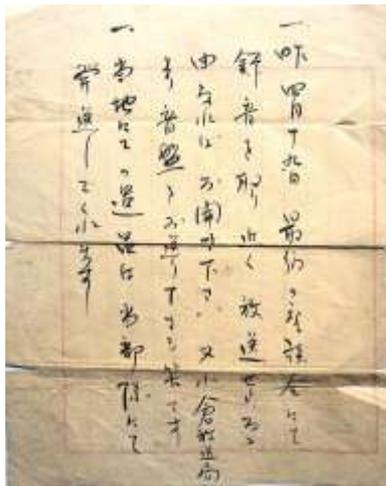
NHK小倉放送局の取材については、隊員の岡山勝己軍曹がその遺書に

二元気で征きます。不幸の罪幾重にも御許し下さい。大事決行も後数時間。19日録音を吹き込みました。近日、小倉放送局よりラジオ放送されます。また家に、軍からか、局よりレコードを送ってくれるはずで。勝己は笑って行きます。何時までも御元気で。祖母様達にも宜しく。御多幸を御祈り致します。

特別攻撃隊 振武隊々員

岡山勝己

父母上様
と記しています。



遺書裏面にある、片岡隊長の両親宛追記

片岡喜作隊長(中学33回)も両親宛の遺書に追記として

「昨四月十九日最後の座談会にて録音を取り 近く 放送せらるゝ由なればお聞き下さい 又小倉放送局より 音盤をお送り下さる筈です。 : : :」

もとに届くことはありませんでした。

翌20日、隊員たちは小月基地から知覧に進出し、22日に知覧を出撃、沖繩本島名護湾にあった海上敵艦船群に突入、戦死されましたが、5月10日夜7時40分から、「出陣前夜の決死の声」との番組名で、約15分間九州全域にラジオ放送され、それを西日本新聞が5月11日の朝刊で次のように報道しています。

見出し

一億へ叫ぶ出撃前夜の神鷲 小倉から録音放送

『肚でぶつつかるよ』

内地暴爆 仇討に空母撃沈

※ 肚(はら 胆力、気力)

リード文

小倉放送局では十日夜七時四十分から全九州へ某基地にて振武特別攻撃隊出撃の前夜を捉えた録音放送を行ひ沖繩決戦に出撃する死生觀に澄み渡つた特攻隊勇士たちの肉聲を電波に乗せて戦ふ九州人の胸を力強い感激に揺つた。この特攻勇士の中には鳥取、佐賀、鹿児島出身の若武者も加はつてをり、語る語調はあまりに淡々としてじつとラジオに耳を傾けて勇士の心境を聴かうと緊張する人々の心底には國民的の神の聲とは思へないほど清澄な流れであつた。勝利へ進む哲學を説き若い曹長は飛行機を一機でも多く送れと銃後に訴え、死ぬのが面白くなつたといふ勇士たちの聲にもつともつと銃後は頑張らねばならぬ。一死必沈の緊張に包まれた出撃前

夜といふのに勇士たちはさらさらと死生觀をもらし朗らかにお國藝を披露しあつて死に赴く人とは思へぬ静かな出撃前夜の十五分間録音が終つた。以下は勇士たちの肉聲である。

本文

立川小倉放送課長

御出發前夜御多忙のところ恐縮でございますが、皆様の張り切つたところからまづお願ひしたい。

片岡隊長

別にお話することはございませんが、私の隊の特攻隊のことを一つ話したいと思つてゐます。いま私の部下は上も下もなく、ただどうして敵に打つかるか、そればかり考へてをります。私が一番苦勞するのはかういふ立派な部下をどうして亡くするかが私の一番の苦勞です。隊長としては何もないことはありません。部下がよくやつてくれる。そればかり私は考へてをります。

牟田少尉

最近の心境は、私はかうしてゐるのが非常に辛いのです。それでどうか一日でも早く出てゆかなくては悪いことをしたやうな氣がします。家を出るとき大變お邪魔になりました。必ずやつて來ますと出て來たにも拘らず命令が出なくて歸つてくるとき、隊長殿からいはれたやうに沖繩決戦には飛行機が悪かつたら腕が悪かつたら肚でぶつつかる。

大場准尉

いまの心境はさうです、私はここに來てから實に感じてゐることで

すが、この戦局は逼迫すると日本人は必勝の信念をもたなければいけない、精神一つになるものと私は思ふ。四、五日前までは悲観的感情をもつたことがあります。かうしてやつて来て見ると緊張した毎日がつづき必ず勝つといふ信念が自から沸いてきました。元元悲観論者は緊張を欠いてゐるのです。

一同
全くだ。

新聞、ラジオによりサイパンの全員戦死、天王山レイテの戦場が間もなく沖繩に移つて國民の中に戦局を悲観的に考へるものがあつたが、いま俺たちが靜かに考へてみると戦勝は必ずわれにあると考へる、これは絶対のことでありませぬ。俺たちがいま特攻隊として征く、そして必ず敵のでかいのをやつつけるために、つぎからつぎへと俺たちのやうなものがかぎりなくつづいてくる、一億が特攻隊としてくると確信してゐる。俺たちは安心して出發することができぬ。

俺も同感だよ。

自分が特攻隊として出てゆくことはただ軍人の本分を完了する氣持だけであつて別に他念はありません。

日本人全體として國民はみな特攻精神をもつてゐる。しかし飛行機が

まだ足りない。國民もよく銃後で飛行機生産をやつてくれるが、いまの戦局からいふとまだまだ足りない。飛行機がなくて泣くことがある。飛行機を作つてゐるものを叱つてやりたいやうだ。

心配するな、俺が出發して敵の船の横腹に近接してあらゆる方法を講じて敵を撃沈させて見せる。

名古屋の上空を通つたとき、爆撃のため名古屋を焼いてゐるのを見たとき、全く申譯のないやうな氣がしましたが、この取り返しは必ず空母撃沈によつて取り返してやらうと思つてゐます。

(放送は更に続いたと思われませんが、新聞記事はここで終わっています。なお、文中、原文のまま旧仮名づかいにしました。また、可能な限り旧字体を使用しました。)

部下たちは、一死必沈、空母撃沈など、特攻への決意を語っていますが、片岡隊長は立派な部下たちをどう死なせるかという苦勞を語っています。操縦技量抜群の部下たちとはいへ、搭乗する特攻機は99式高等練習機。515馬力(実用機の一式戦闘機は1,150馬力、最新鋭の四式戦闘機は1,825馬力)、最高速度349km/h、航続距離約1,000km、250kg爆弾を搭載するので、2人乗りの機体に5人搭乗するよなもので、離陸さえ思うようにできません。やつこの思いで離陸しても、速度は200km/hが限界で、最高速度600km/hを超える米軍戦闘機のグラマンF6Fヘルキャット

やノースアメリカンP51マスタングに



99式高等練習機(99高練)
陸軍の特攻に使用された機種は重爆撃機から戦闘機、さらには旧式の固定脚97式戦闘機や95式中間練習機(通称赤トンボ)まであらゆる機種が動員された。99式高等練習機は特徴のある低翼単葉機で、95式中間練習機から実用機に進む中間過程の練習機として広く使用された。
乗員2名 全長8.92m 幅11.80m 自重1,247kg
発動機ハ13甲 515ps

迎撃されればひとたまりもありません。隊員たちは、実用機で出撃すれば敵艦を攻撃、戦果を挙げて帰還できる技量の持ち主だけに、練習機で出撃する部下たちを思うと、片岡隊長はなんとか敵艦に体当たりさせたい、無駄死にだけはさせたくないといふ心と心を痛めていたものと思われませぬ。本来ならば指揮官は作戦と同時に、部下をいかに生還させるかを考えるものですが、立派に死なせることを第一としなければならなかつた片岡中尉の氣

持ちを推し量ると、戦争の持つ不条理がより一層身にしみませぬ。

録音を終えた片岡隊長は、兄の岡山軍曹を見送りにきていた妹のよし子さんと会い、取り急ぎ自分の名刺の裏に奥様の重子様へ次のような別れの言葉を記し、よし子さんに託しています。

重子様 元氣に暮らせ
父は強く征きます
子供と共に日頃の心掛け通り
達者で

四月十九日 喜作

片岡隊長は翌20日の早朝、知覧への出発前に妻子と両親宛の遺書をしたため、郷里に送っています。もし遺書が家族のもとに届かなかつた場合を考えて、名刺をよし子さんに託したものとされています。

この名刺は、1987(昭和62)年6月28日に開催された「全陸軍航空部隊陣前祭」の式典で多くの遺族を代表して、「英霊に捧げることば」を片岡重子さんが述べられました。その際に傍らに付き添つておられた岡山よし子さんから重子さんに手渡され、その後靖国神社に奉納されました。(高21回 松井泰寿)

創立六十周年の昭和三十二年に作成した校旗は、劣化が進んだため、この度、新調しました。
来る二月二十九日、同窓会から学校への贈呈式を実施します。



特攻隊が出撃した知覧飛行場

振武特別攻撃隊長 5～突入、戦死～

片岡喜作中尉(中学 33 回)を隊長とする第 81 振武特別攻撃隊は 4 月 20 日、小月飛行場から知覧基地に進出、4 月 22 日、第 4 次航空総攻撃の命令が下され、午後 3 時 18 分、知覧基地を出撃、祖国の安泰と繁栄を願って片岡隊長以下 10 機は、沖縄本島名護湾にあった海上敵艦船群に突入し戦死されました。(なお、陸軍少年飛行兵 10 期生・橋本栄亮軍曹はエンジン不調により途中で引き返し、4 月 26 日単独出撃突入戦死されました)。本紙では戦後 70 年の昨年(2019)から戦争に関わった先輩方の足跡を追っています。

遺書

小月基地にて、「4 月 22 日知覧基地から出撃せよ」との命令を受けると、片岡隊長は両親と重子夫人に「待望の時機来たりて 本日〇〇(機密保持のため特攻の 2 文字が伏せ字になっています)下命愛機を操って勇躍 制空の途につかんとす 兄と共に故郷の名を辱めざらん事を期す 委細後報 不備(文意が十分でないという意で、手紙文の最後に添える語)との一報をまず送り、第 81 振武隊の 12 名は 4 月 20 日知覧基地に進出して行きました。「振武隊指導及出撃準備要領」によれば、「振武隊ノ當(知覧)飛行場到着ハ出撃前々日夕刻迄トス」とされており、それに従っての小月基地出発でした。その日の朝、片岡隊長は奥様、子供たち、両親への遺書をしたため、奥様と両親のもとへ送っています。

〇奥様への遺書

重子様

神機到来し只今発進します。

別紙名簿(遺品中にある)の隊員より心から心服せられ肉親以上の情けに守られて征きます。また当山口県小月飛行場に於て約 10 日間待機、附近の村民各位より誠心のもてなしを受け本場に幸福に征きます。その状況は宿舎附近に居られる豊島とし子様、桜井朝子様、西山の奥様等より貴女にお知らせ下さる筈です。皆な敢然として総てを私達の為に世話を下されました。貴女様からお礼を申し述べて下さい。

なお士官学校同期の船木中尉殿も当

地にあり不眠不休でお世話下さいました。

貴女様には何も夫らしきことを為し得ざりしもお許し下さい。

私は幸福に征きます。体を大切に末永く子供と共に暮らされる様お祈り致します。

私の散華後、軍との交渉に於いて不明の点あらば、埼玉県大里郡三尻村東部五四〇部隊に連絡せられ度し。

御両親に孝養をつくしつゝ子供をお願い致します。

四月二十日 九時

指揮所にて

〇子供たちへの遺書

三枝子

礼子

生まれ出づる子

お父様は大君の為、特攻隊長として敵艦に飛行機と共に衝突命中米英共を討ち滅ぼします。

幼少にして父と別れますがお母様は本当によい母でありお父様と同じ心なのだからよくお母様のお教えを守り良い子になるんですよ。病気をせずにお父様は幸福の裡にお前達と別れます。

さようなら

〇両親への遺書

お父様

お母様

喜作

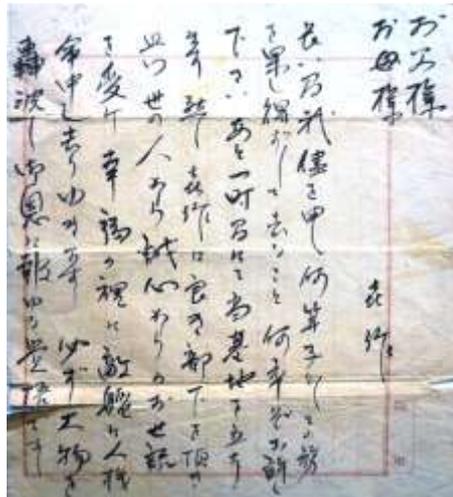
長い間我儘を申し 何等子としての義務を果し得ずして去ること 何卒お許し下さい あと一時間にて当基地を立

ちます 然し 喜作は良き部下を頂き且つ 世の人から誠心からのお世話を受け 幸福の裡に 敵艦に人機 命中し去りゆきます 必ず大物を轟沈し御恩に報ゆる覚悟です

一、昨四月十九日 最後の座談会にて 録音を取り 近く 放送せらる、由なれば お聞き下さい 又 小倉放送局より 音盤をお送り下さる筈です

一、当地にての遺品は 当部隊にて 発送してくれます

両親への遺書



神機到来、人機命中

4 月 22 日、第 6 航空軍による第 4 次航空総攻撃が実行され、知覧基地からの突入機は「第 79 振武隊 1 機」・「第 80 振武隊 11 機」・「第 81 振武隊(片岡隊長) 11 機」の 99 式高等練習機及び「第 105 振武隊 6 機」・「第 109 振武隊 4 機」の 97 式戦闘機でした。33 機の特攻機群は午後 2 時以降、逐次知覧基地を出撃し、66 戦隊の 99 式襲撃機 1 機に誘導されて奄美群島西

方を前進。空中援護は55戦隊、59戦隊の3式戦闘機飛燕18機が喜界島まで、それ以南は100飛行団が担当し4式戦闘機疾風21機で援護しました。

特攻機群は夕刻、日没直前、沖繩に到着、低空から敵艦に接近し、全隊攻撃突入が認められました。突入時刻は夕刻5時半から7時半、上陸支援艇LCS15号と掃海艇スワローを撃沈、駆逐艦ハドソン、ワズワース、イツシヤード、敷設艦シアール、掃海艇ラムソン、グラジエーターの計6隻を損傷させました。

この出撃を知覧基地で見送ったのが部下の大関馨氏。大関氏は整備兵として81振武隊に知覧まで同行しましたが、原隊へ帰隊後、奥様への書簡(知覧特攻平和会館蔵)の中で出撃の様子を次のように記しています。

「中尉殿にはこの度振武特別攻撃隊長として、四月二十二日十五時十八分〇〇(知覧)基地出発致され、永久の大義に生くとの言葉にて元氣にて征途に向かはれました。基地にて最後の遺品として小兵持参致し、本日小包にて御送り申し上げます。ご承知下さいまし。

中尉殿、生前は色々ご心配に相成り、この度の出撃にもお供を致し前進基地にてお別れ致した次第であります。小兵征務違いで一人原隊に帰りたるは誠に残念にて、なんとお話し申し上げてよいやら、唯言葉の先に立つは涙のみ。奥様におかせられてもさぞお歎の御事と存じます。ご心中容としてお察し申し上げます。昨日迄は隊長殿としてお慕い致しながら之れが永久のお別れになるうとは、全く夢ではないかと出撃後の夕空の下、飛行場で唯一人南の空をながめ居

りました。ああ隊長殿は大義に生くるとのお言葉を残して征かれました。

奥様におかれましては、お子様たちとともに、恙なくお暮らしあらん事を祈り申し上げます。色々御通知申し上げたく思い居りますれど、感極まれば先に吾が涙のみ、お許し下さいませ。乱筆を謝じ御通知並びにお悔みまで。敬白

大関馨

片岡重子 様



知覧特攻平和会館に復元された、三角兵舎とその内部



この片岡隊長の戦死の報を、派遣されていた台湾で知ったのが、館林教育隊時代の教え子であった土田直鎮氏(つとねのちか)が第3期特別操縦見習士官・東京大学国史学科卒・東大教授・東大史料編纂所所長・国立歴史民俗博物館館長・日本古代史。平成5年歿)。土田氏は片岡隊長の特攻による散華について「軍隊全期を通じて、新聞など見る機会にはほとんどなかったが、後に台湾に行

ってから、偶然ある小学校の教室にあった一枚の新聞を見て、私はこの片岡中尉が沖繩に突入したことを知った。新聞には中尉が、『教え子がたくさん先に行っているから、会うのが楽しみですよ』と言って嬉しそうに飛び立ったと書いてあったが、我々この教官に習った者として、それが記者の作文ではなく、片岡中尉が念願かなって、本当に喜んで突っ込んだことを絶対に確信する。中尉については教育隊の教官としてのことしか知らず、他に、すでに妻子があり、夫人は館林一の美人であったとも聞くが、この教官の印象は私には終生忘れがたいものになるう。」と記しています(東大十八史会編『学徒出陣の記録』あるグループの戦争体験 中公新書 1968(昭和43)年刊行)。

4月22日、奇しくも母校土浦中学の創立記念日に片岡隊長は出撃、戦死されました(戦死後、少佐に昇進)。その35日目に、ご長男が誕生しました。

感謝の供養

館林駅で片岡中尉を見送った奥(旧姓関口)純子さんは戦後、孫の針ヶ谷穂高氏(我孫子市在住)に「私が敗戦のショックや戦後の混乱期を乗り越えて、生きてこられたのは片岡中尉のお蔭です。館林駅で頂いた片岡中尉の言葉がどれだけ私を勇気づけ、励ましてくれたか分かりません。片岡中尉は命の恩人です。」と語ってこられました。幼少から純子さんのお宅を訪れるたびに、片岡中尉の人となりをお聞きされてきた針ヶ谷氏は、成人されると片岡中尉の眠る館林市の五宝寺やつくば市玉取の実家を訪れ、供養

の誠を捧げてこられました。さらに知覧特攻平和会館に純子様とともに片岡中尉供養のための灯籠を献灯し、片岡中尉が突入戦死された沖繩名護湾も訪れ、供養の香華を手向けられました。現在でも片岡中尉に関する資料を入手されると、実家を訪れ、片岡中尉の霊前に供えられています。



平成26年4月、奥順子・針ヶ谷穂高の両氏が片岡喜作中尉の供養のために建立された石灯籠。(石灯籠は、知覧基地をはじめ各基地から出撃散華された1,036柱の陸軍特別攻撃隊の英霊を顕彰し、永遠のご冥福をお祈りするために建立されています。)

(高21回 松井泰寿)

旧本館改修工事が間もなく始まることに伴い、旧正門が使用できなくなることから、仮設の通用門が同窓会館横に設けられます。また、旧本館内に展示されていた物品は、昨年中に校内各所に格納されましたので、現在の旧本館内部には何も無い状態です。建設当時を知るためには絶対の機会ですので、過日、現一・二年生対象とした見学会を実施しました。